

THE JAPAN FOUNDATION

2013 / 2014

國際交流基金 2013 年度年報



日本の文化で、世界との絆を。

富士山がユネスコ世界文化遺産に、そして日本食が同無形文化遺産に登録され、

また、「もったいない」に続いて「おもてなし」の価値観が広まる等、

日本の文化に対する世界の注目が高まっています。

国際交流基金は、日本文化の様々な側面を通して

海外の人々との対話を広げ、相互理解を進め、そして、未来を担う若者たちの間に信頼を育て、

世界と日本の絆を深めています。



文化芸術交流

豊かで多様な日本の文化や芸術を様々な形で世界各地に向けて発信します。文化芸術を通して日本のこころを世界の人々に伝え、言葉を越えた共感の場をつくり出し、また、共に創造する喜びをわかちあって、人と人との交流を深めていきます。



海外における日本語教育

より多くの人々に日本語を学ぶ機会が与えられるように、そして、日本語学習を長く継続できるように、日本語をより学びやすく、より教えやすいものとするため、日本語教育の基盤や環境の整備を行います。また、各国・地域の政府や自治体、教育機関等と連携して、それぞれの教育環境、教育政策、学習者の目的や関心に十分に対応した事業を行います。



日本研究・知的交流

海外での日本研究を支援し、その振興をはかることで、世界の各国で、人々に、日本がより深く理解されることを目指します。また、国際的な重要課題、共通の関心事項について、日本と海外の人々の間で対話する機会を作ることで、日本の対外発信を強化すると共に、将来の対話や交流事業の中心的な役割を担う人材を育てるための事業を推進します。

理事長からのごあいさつ

2013年9月、ブエノスアイレスで開かれた国際オリンピック委員会総会において、2020年の夏季オリンピック・パラリンピック開催地が東京に決定しました。また、その前後には、富士山がユネスコ世界文化遺産に、日本食が同無形文化遺産にそれぞれ登録される等、私たち日本人が守り育ててきた自然や文化が世界の人々から認められ、日本に対する注目と期待が示される出来事がありました。

世界の人々の日本に対する関心は、日本語学習者に関するデータからも読み取ることができます。国際交流基金が2012年度に実施し2013年夏に結果を公表した海外の日本語教育に関する調査では、海外の教育機関で日本語を学ぶ人の数は3年前より30万人増加し、世界136ヵ国・地域で約400万人に及ぶことが明らかになりました。学習者の半数以上は、高校生・中学生です。次世代を担う若者層が日本に関心を寄せ、日本語を学習していることは嬉しく、心強いことです。国際交流基金は、こうした学習者の関心、期待に応えていくことができるよう、「世界のどこでも日本語をより学びやすく、より教えやすくする環境の構築・整備」をモットーに、日本語学習者の数の増加と質の充実をめざしています。

将来を担う若者は、国際交流基金の全ての交流事業分野で重要なターゲット層です。若者同士が国境を越えて互いを理解し、友情を育む交流をこれまで以上に拡充すべく、2013年度には政府が推進する北米地域との青少年交流の一環として「KAKEHASHIプロジェクト」を開始しました。同プロジェクトでは、2年間に4,600人の日本と米国の大学生・高校生等が、相手国を訪れ人々と交流します。好奇心にあふれ、文化の違いを楽しむことのできる若者たちが、国際交流基金の事業を通じて新たな友情の輪を広げています。

地域に目を転じますと、2013年度はアジアとの交流の抜本的強化を期する一年でした。日本とASEAN（東南アジア諸国連合）の友好協力関係40周年を記念するイベントが多数催される中、国際交流基金も年間を通じて、美術、舞台芸術、映画と様々なジャンルの文化芸術交流事業、そして日本語弁論大会やシンポジウム、ワークショップ等、合計40件以上のプロジェクトを集中的に実施し、大きな反響を得ました。

12月の日ASEAN特別首脳会議（東京）の場で日本の新しいアジア文化交流政策「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア」が表明されたことは、アジアとの交流強

化の大きな節目となりました。同プロジェクトを実施するため、国際交流基金は2014年4月にアジアセンターを開設しました。2020年までの7年間を目途に300億円規模の予算で、アジア各国との芸術・文化の双方向交流、アジア域内の交流、そして日本語学習支援に、ダイナミックに取り組んで参ります。

金融危機や東日本大震災以降、人々の価値観や意識が大きく変化し、また、ソーシャルメディアに代表されるテクノロジーの進化によって、国境を簡単に超える規模の、タイムラグのない情報の拡散・共有が可能な時代を迎えています。国際交流基金は、国内外の社会の変化に敏感に対応し得るしなやかな組織と、変化を先取りする事業展開を実現して、国内及び海外の皆様からより強い共感を得られるよう、努めていきたいと考えています。

引き続き、皆様のご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

2014年9月
国際交流基金 理事長 安藤 裕康



国際交流基金 2013年度 年報 Contents

- 03 理事長からのごあいさつ
- 05 国際交流基金（ジャパンファウンデーション）とは
- 07 2013年度 主要事業カレンダー
- 09 グラビア
 - 外交周年の機会をとらえた事業展開
- 11 次世代交流の拡大
- 12 日本語学習の促進

13 文化芸術交流

- 15 多様な日本の文化・芸術の海外への紹介
- 18 文化・芸術を通じた世界への貢献
- 20 中国との青少年交流

21 海外における日本語教育

- 23 海外における日本語普及のための基盤・環境の整備
- 27 国・地域の事情に応じた日本語普及

29 日本研究・知的交流

- 31 海外の日本研究の促進
- 33 知的交流の促進
- 34 米国との知的・草の根交流
- 36 米国との青少年交流

- 37 国際文化交流への理解と参画の促進

39 海外拠点の活動

- 47 事業実績
 - 文化芸術交流
- 49 海外における日本語教育
- 51 日本研究・知的交流
- 53 民間からの資金協力
- 55 財務諸表
- 58 諮問委員会等
- 59 組織図
- 60 拠点一覧
- 61 ご案内

日本と世界を文化でつなぐ架け橋として



沖縄舞踊東南アジア公演 (1986)



フランクフルト図書展「日本年」 (1990)

アフリカでのスポーツ指導 (1980 頃)



1991

- 日米センター開設
- 安倍フェローシップ開始



1989

- 日本語国際センター開設

1984

- 日本語能力試験開始

欧州の日本研究者集会 (1973)



1973

- 国際交流基金賞創設
- 国際交流基金フェローシップ開始

ロンドンでの「江戸大美術」展 (1981)



1990

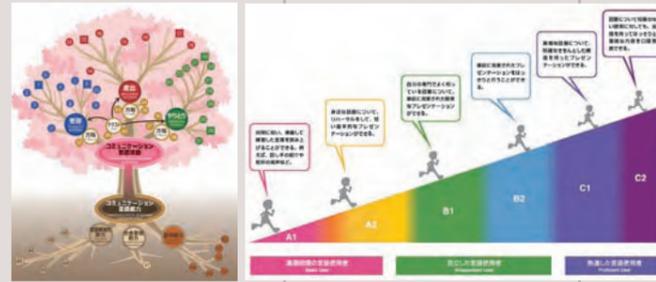
1990

- アセアン文化センター開設 (1995年アジアセンターに改組/～2004)

東南アジア祭 (1992)



JF日本語教育スタンダード発表 (2010)



2003
独立行政法人国際交流基金発足

2005

2006

- 日中交流センター開設



1997

- 関西国際センター開設
- パリ日本文化会館開設



震災を乗り越えて (2012)



国際交流基金(ジャパンファウンデーション)とは

世界の全地域において、総合的に国際文化交流事業を実施する組織として、1972年10月に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年10月に独立行政法人となりました。本部、京都支部、2つの附属機関(日本語国際センター、関西国際センター)、更に海外21ヵ国に設置する22の海外拠点を中心に、国内外の諸団体と連携しつつ、文化芸術交流、海外における日本語教育、日本研究・知的交流の3つを主要分野として活動しています。政府出資金(780億円)を財政的基盤とし、この出資金の運用益、政府からの運営費交付金及び民間からの寄付金等により運営しています。役職員数は230人(2014年7月現在)です。

国際交流基金の設立は2002年(平成14年)に定められた以下の法律に則ったものです。独立行政法人国際交流基金法 第3条「独立行政法人国際交流基金は、国際文化交流事業を総合的かつ効率的に行うことにより、我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与することを目的とする。」

2013 年度主要事業カレンダー

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
文化芸術交流												
■「昆明ふれあいの場」オープン（中国）→ P.20		■第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「abstract speaking -sharing uncertainty and collective acts」（イタリア）→ P.19 ■「南蛮漆器：スペインに残された『日本』」展（スペイン）→ P.41		■宮城ーニューオーリンズ青少年ジャズ交流派遣事業（米国）→ P.11、P.19 ■中国高校生長期招へい事業第8期生来日 → P.20		■国際共同制作演劇「祝／言」公演（日本、韓国、中国）→ P.19、P.42 ■「Drums&Voices」公演（ベトナム、カンボジア、ミャンマー、タイ、ラオス、ブルネイ、日本）→ P.9、P.15		■「MAU：J-ASEAN Dance Collaboration」公演（インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール）→ P.9、P.18 ■「済南ふれあいの場」オープン（中国）→ P.20		■「蚕ー皇室のご養蚕と古代裂、日仏絹の交流」展（フランス）→ P.16 ■小山豊邦楽トリオ「中米諸国へ響かせる和のハーモニー」公演（エルサルバドル、キューバ、パナマ）→ P.16		■日本人高校生の中国訪問 → P.20
海外における日本語教育												
■「JF日本語教育スタンダード 2010」第2版第2刷発行 → P.23			■2013年第1回日本語能力試験（全世界）→ P.26 ■2012年度日本語教育機関調査 速報値発表 → P.24 ■米国JET記念高校生訪日研修 → P.28		■「まるごと 日本のことばと文化」入門（A1）市販化、公式ポータルページ開設 → P.23、P.25 ■「にほんご人フォーラム」（日本）→ P.28		■「海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より」発行 → P.24 ■経済連携協定（EPA）に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者に対する日本語予備教育事業 → P.27		■2013年第2回日本語能力試験（全世界）→ P.26 ■海外日本語教師日系人研修 → P.28			
日本研究・知的交流												
	■「KAKEHASHI プロジェクト」米国中学・高校・大学生招へい（計7回）→ P.11、P.36 ■北京大学現代日本研究センター訪日研修 → P.31		■JOIプログラム第12期コーディネーター派遣（米国）→ P.35 ■チュラロンコン大学客員教授派遣 → P.31 ■米国国際関係論専攻大学院生招へい → P.34		■「KAKEHASHI プロジェクト」米国若手研究者招へい（計5回）→ P.36	■シンポジウム「調和するアジア～文化交流の新時代」（日本）→ P.9、P.33 ■講演会「蘇りつつある2011年大震災後の日本ーアジアにおけるその役割」（ウズベキスタン、キルギス、カザフスタン）→ P.32 ■「KAKEHASHI プロジェクト」高校・大学生派遣（米国、計5回）→ P.36		■米国アジア専門家招へい → P.34 ■福島・中国高校生友好交流事業「あいだみ」（中国）→ P.33		■「KAKEHASHI プロジェクト」学生クリエイター派遣（米国）→ P.36 ■日系アメリカ人リーダーシップ・セミナー（日本）→ P.35 ■講演会「ミャンマーの未来を拓くーすべての人々に平和と恩恵を」（日本）→ P.33		
共通												
■日本・ASEAN 友好協力40周年記念事業（ASEAN 各国、通年）→ P.9、P.15、P.33、P.44 ■第5回アフリカ開発会議（TICAD V）（日本）→ P.9		■日本スペイン交流400周年記念事業（スペイン、～2014年7月）→ P.9、P.15、P.41				■第41回国際交流基金賞授賞式（日本）→ P.37		■日・スイス外交関係樹立150周年記念事業（スイス、通年）			■第29回国際交流基金地球市民賞授賞式（日本）→ P.37	

外交周年の機会をとらえた事業展開

「調和するアジア—文化交流の新

Asia in Harmony : New Horizons for Cultural E

主催：国際交流基金、日本経済新聞社 後援：内閣官房(アジア文



撮影：高木あつ子

日・ASEAN 友好協力 40 周年、日本スペイン交流 400 周年、更に、横浜で開催された第 5 回アフリカ開発会議 (TICAD V) 等、外交の周年機会をとらえて、アピール力の強い大型事業を集中的に国内外で展開しました。



撮影：Sittdej Nuhoung





© 野田雅之



© Hiroshi Sugimoto, courtesy of Odawara Art Foundation



撮影：木奥恵三

次世代交流の拡大



日本と海外の若者が協働してつくりあげるプログラム、交流の担い手層のネットワークを形成するプログラム等で、将来を担う若者どうしの双方向交流の拡大に努めました。



日本語学習の促進



海外での日本語講座、日本語教師及び学習者に対する研修の拡充、また、eラーニングを含む教材の開発に努めました。特に若者層の学習者の増加が見込まれるアジア各国では、各国政府と連携して日本語教育の充実に向けた基盤整備に取り組みました。





© Clement-Olivier Meylan



Arts and Cultural Exchange 文化芸術交流

豊かで多様な日本の文化や芸術を様々な形で
世界各地に向けて発信します。
文化芸術を通して日本のこころを世界の人々に伝え、
言葉を越えた共感の場をつくり出し、また、
共に創造する喜びをわかちあって、
人と人との交流を深めていきます。





文化芸術交流事業の概要

多様な日本の文化・芸術の海外への紹介

伝統芸能から現代アートまで幅広く、また衣食住の生活様式や価値観まで、多様で豊かな日本の文化芸術を、公演・実演・ワークショップ、展覧会、映画・テレビ、翻訳・出版、講演・対話等の形で、世界の人々に紹介します。各地域・国の状況や需要に照らして事業計画を立て、特定の地域・国に向けては特に重点的かつ集中的に、広く世界各地に向けては継続的かつ効率的に、日本文化の紹介を進めています。更に、日本の文化芸術に関する基礎情報を、ウェブサイト等を通じて世界に常時発信しています。

>>>P.15

文化・芸術を通じた世界への貢献

国を超えた専門家同士の交流や共同制作、共同作業を地道に積み重ねることで、文化芸術の各分野で強固なネットワークを構築します。また、日本の持つ経験と知見を活かして相手国が必要とする専門的な人材の育成を支援し、国際文化交流が持続するための基盤を整えます。更に、災害復興、環境、平和構築、文化遺産の保護・活用など世界共通の課題について、文化や芸術を通して、日本と外国の人々が共に考え、共感を深める場を作り出します。

>>>P.18



外交上重要な機会、
地域・国への重点的な対応

双方向型、
共同作業型の交流事業

広く全世界に向けた継続的な
事業展開

世界共通の課題への取組み

中国との青少年交流

日本と中国の未来を担う青少年を中心とした交流活動を促進し、お互いの生活や文化を体験する機会を提供することで、両者の相互理解を促し、より深く息の長い「心と心のつながり（＝心連心）」を築いていくことを目指して、双方向性と協働性を重視した事業を実施しています。

>>>P.20



外交上重要な機会、地域・国への重点的な対応

日・ASEAN 友好協力 40 周年、日本スペイン交流 400 周年等を迎えた 2013 年、この好機を活かして、アピール力の強い大型事業を展開しました。その一方で、世界中の国々でそれぞれのニーズに合わせ、巡回公演、他機関との連携・協力による展覧会等で持続的・継続的な日本の文化発信に努めました。

■ 「Drums&Voices」

ベトナム、カンボジア、ミャンマー、タイ、ラオス、ブルネイ、日本の 7 カ国、12 人の伝統音楽演奏家による公演団を結成し、これら 7 カ国全てを巡回する共同制作プロジェクト「Drums & Voices」ツアー公演を実施しました（ブルネイのみ、日本人とブルネイの音楽家による共同公演）。本公演の曲作りのための共同ワークショップをタイ（6～7月）及びベトナム（8～9月）で計 4 週間行った後、10～11月に参加各国を巡回、12月には全アーティストを日本に招聘し、東京で公演を行いました。東京では、日・ASEAN 首脳特別会議にあわせて安倍総理大臣夫妻によって主催されたガラディナーにおけるミニコンサートも行いました。ASEAN 各国の首脳、政府関係者の前で今回の共同制作の成果を披露し、日本と ASEAN 諸国がこれまで築いてきた友好関係や今後のより親密な関係のあり方を示すひとつの象徴的な事業として、その役割を果たしました。

伝統的な音楽を専門とし、打楽器における高いスキルを持ち、長期にわたる本プロジェクトに参加可能な各国アーティストの調査・選出は容易ではありませんでした。ワークショップの場でも、近隣国ながら音楽的・文化的バックグラウンドが異なり、互いに



ASEAN 各国の出演者たち 撮影：栗本一紀



「Media/Art Kitchen」展 撮影：Sittdej Nuhoung

ほとんど言葉も通じず、共に音楽づくりを行うことには大きな困難を伴いました。今回音楽監督を依頼した作曲家・大島ミチル氏にとっても、アジアの伝統音楽との出会い、コラボレーションは初めての経験でしたが、計 4 週間のワークショップでは、互いの音楽の相違あるいは共通性・類似性を丁寧に理解し合うことから始め、卓越した音楽的スキルと真摯で誠実な姿勢のもと、最終的には各国音楽家たちが共同で、単なる各国の伝統音楽紹介ではないオリジナル 15 曲を完成させました。参加した各国の音楽家たちも、葛藤を感じつつも、プロジェクトの意義を十分に理解し、素晴らしいチームワークを結成して、各地で質の高い演奏を披露しました。

■ 杉本文楽 欧州公演

現代美術作家の杉本博司氏が構成・演出・美術・映像を手がけた「杉本文楽 曾根崎心中」をマドリッド・ローマ・パリの 3 都市で上演しました。マドリッドとローマで各 2 回、パリで 11 回、計 15 公演を行い、あわせて 12,000 人を超える来場者がありました。

日本スペイン交流 400 周年を記念して行われたマドリッドの公



© Hiroshi Sugimoto, courtesy of Odawara Art Foundation

演では、チケットが完売となり、公演前には当日券を求める行列ができる等、大きな注目を集めました。会場に詰め掛けた観客からは、「ビジュアルアートの挿入部分は緻密にバランスよく構成されていたし、舞台演出の陰と陽のコントラストは美しかった」「文楽公演を見たのは初めてだったが、その文学的内容の濃さ、太夫の語りと音楽のすばらしさ、そして完璧で美しい舞台演出に目を見張った」「観客がこれほどまでに舞台にのめりこんでいる様子は、最高の高みにある芸術は言語や文化の壁を乗り越えるということを如実に示すものだと思う」等、作品の文学的な素晴らしさ、文楽という日本独自の芸能の優れた芸術性に魅了されたことを強く印象付けるコメントが寄せられました。

■ 小山豊邦楽トリオ「中米諸国へ響かせる和ハーモニー」公演

慶長遣欧使節団キューバ上陸 400 周年と日・パナマ外交関係樹立 110 周年を記念し、2014 年 2 月 18 日から 26 日まで、小山豊氏（津軽三味線）、加藤拓哉氏（和太鼓）、辻本好美氏（尺八）による邦楽トリオが中米巡回公演を行いました。和洋の様々な楽器との共演を通じて国際的に活躍する小山氏が率いるトリオは、エルサルバドル、キューバ、パナマの 3 カ国でコンサートやレクチャー・デモンストレーションを行い、日本の現代邦楽の魅力を中米の音楽ファンに届けました。

エルサルバドルでは、首都サンサルバドルと古都サンタ・アナでコンサートを開催。同国で伝統音楽の継承に取り組むシンガーソングライター、セサル・ダヴィッド・メリノ（César David Merino）と共演にも挑戦し、超満員の観客から温かい拍手が送られました。

更に、キューバでは同国最大の文化行事であるハバナ国際図書展の屋外特設ステージで、3,000 人近い観客を前に演奏を披露。伝統的なリズムの再興を目指す人気歌手ダヴィッド・アルヴァレス（David Alvarez）氏率いるグループとの熱気を帯びた共演の評判は、瞬間にハバナ市民の間を駆け巡り、翌日のメジャ劇場でのコンサートでは、会場を満杯に埋め尽くした観客から盛大なスタンディングオベーションを受けました。



公演前から国営テレビで CM が放映されていたパナマでは、開演直前に大雨による停電のハプニングに見舞われましたが、会場に集まった熱心な観客から演奏が終わるごとに大歓声が上がりました。

トリオのメンバーはどのコンサートでもスペイン語で観客と対話したり、各国の有名な曲を独自のアレンジにより邦楽器で演奏したりしながら、豊かな音楽文化を誇る中米各国の人々に日本の音楽の無限の可能性を印象づけました。観客動員数は 3 カ国 4 都市で約 7,300 人。出演テレビ番組の視聴者はその数をはるかに凌駕します。

仙台藩主・伊達政宗の命を受け渡欧した支倉常長がキューバを訪れて 400 年後の 2014 年、小山豊邦楽トリオは日本と中米諸国に音楽の虹を見事に描きました。

■ 「蚕—皇室のご養蚕と古代裂、日仏絹の交流」展

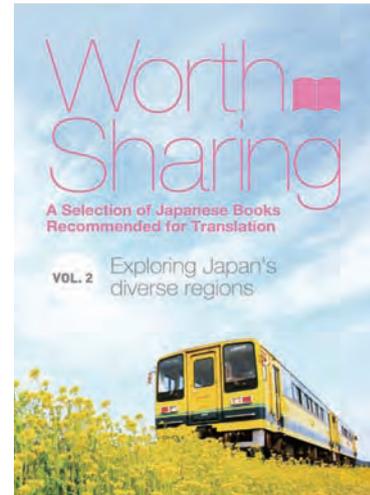
本展覧会は、宮内庁、文化庁との共催により明治時代から現在まで皇室で大切に引き継がれている皇后陛下のご養蚕をパリ日本文化会館において紹介したものです。皇后陛下が飼育されている純国産の蚕「小石丸」の絹糸によって復元された正倉院宝物、更に日仏の絹の交流の様子を示す作品等が展示され、また宮内庁制作の実際のご養蚕の様子を伝える DVD も上映しました。

観客からは、皇室が日本の伝統文化の継承に大切な役割を担ってこられたことへの驚きと敬意の念が寄せられると共に、古い伝統が 21 世紀の今日にも活かされ続けているところが素晴らしいといった声も多く聞かれました。また展覧会では、蚕、絹の糸を通じた日仏の双方向交流の軌跡が示され、好評を博しました。



広く全世界に向けた継続的な事業展開

多様なジャンルとテーマで構成された国際交流基金巡回展、全12言語版の日本映画を揃えるフィルム・ライブラリー、劇映画やドキュメンタリーのDVD等、国際交流基金の文化リソースを活用した展覧会や映画上映会を、全世界で広く実施しています。更に、日本のドラマやアニメ、ドキュメンタリー番組のテレビ放映、各国の国際図書展や美術展・建築展等への継続的な出展、日本に関連する書籍に対する翻訳出版助成等、様々な形で日本文化を紹介し続けています。



■ 翻訳推薦著作リスト『Worth Sharing』

国際交流基金は「翻訳出版助成プログラム」を通じ、40年間にわたり、日本に関する図書の海外出版を支援してきました。このプログラムにより翻訳・出版された図書は1,500件以上、言語数は50を超え、そのジャンルは古典文学、現代文学、歴史、社会学、政治、経済から文化論に至るまで様々です。

海外の人々の間で日本の現代社会理解が一層進むことを願って、特に翻訳・出版が期待される優れた著作を小冊子『Worth Sharing—A Selection of Japanese Books Recommended for Translation』にまとめ、紹介する取組みを進めています。日本の「いま」を描き、日本社会や日本人について等身大の姿を伝える優れた著作を日本からも積極的に発信していくための仕掛けです。選書には、日本の文学と翻訳に精通している選書委員の協力を仰ぎました。

本リストでは、これまで現代日本の図書があまり紹介されてこなかった言語圏での指針となるよう、テーマをゆるやかに設定した上で選書しています。1つの切り口から見た日本の姿が、視点を変え、異なる角度から眺めれば、新たな色彩を放つ、一面的には捉えがたい日本の文化と社会の諸相を伝えることを目指しています。

2012年に刊行した第1号のテーマは「日本の青春」。若者をテーマに20冊を選書しました。小説の他、若者が直面する現代の社会問題や、若者の現代的な価値観や美意識を論じた研究書や評論も含めています。2013年に刊行した第2号のテーマは「日本の地方」。日本の様々な土地や風景を描いた現代文学作品を18点、ノンフィクションを2点紹介しました。

この冊子に掲載した図書の翻訳出版については、質の高い翻訳と適切な出版計画があれば、「翻訳出版助成プログラム」でも積極的に支援を行っており、多くの国で出版が相次いでいます。このリストをきっかけに、日本の作品、作家、翻訳者や出版社が出会い、海外の読者一人ひとりに日本との交流の芽が生まれることを期待しています。

■ 巡回展に合わせたレクチャー・デモンストレーション、ワークショップ

国際交流基金巡回展は、アート、建築、デザイン、ポップカルチャーをはじめとする多様なジャンルとテーマで構成された国際交流基金の文化リソースの1つです。この巡回展の実施に合わせて専門家、実演家などを派遣して、レクチャー・デモンストレーション、ワークショップ等複合的な事業を積極的に展開し、より深い日本理解の促進に努めています。

2013年度には、日本社会でブームを引き起こした国民的キャラクターを画像やパネルで紹介する巡回展「キャラクター大国、ニッポン」のブラジル（クリチバ）での開催にあたり、日本を代表する声優の古谷徹氏を派遣して、現地のアニメ及びポップカルチャー関係者との交流や現地美術館でのレクチャー・デモンストレーションを実施しました。

また、東北の手仕事にスポットを当て、現代の日本で忘れ去られかけている古代からの営みである手仕事の美しさを紹介する巡回展「美しい東北の手仕事」展を、ロシア（ユジノサハリンスク、ババロフスク、ウラジオストク）で開催した際には、日本の民藝に関する専門家である三浦正宏氏による東北文化に関するレクチャーと、樺細工職人の米沢研吾氏によるデモンストレーションや成田卓治氏によるこぎん刺しのレクチャーとワークショップを併せて実施しました。



双方向型、共同作業型の交流事業

日本と海外のアーティストとスタッフが長い時間をかけて共に1つの舞台公演や展覧会を作り上げる場を創出し、共同制作の成果である作品を国内外で紹介しています。このような共同制作は、美術館や博物館の学芸員、舞台芸術公演のプレゼンターやプロデューサー等の様々な分野で文化芸術活動を支える担い手たちを招へい・派遣し、国際シンポジウムや対話事業を継続的に実施することで、専門家同士のネットワーク作りや関係深化を行った結果として生まれてきたものです。



「Media/Art Kitchen」マニラ展での梅田哲也《Almost Forgot》の展示風景

■「MAU: J-ASEAN Dance Collaboration」

日・ASEAN 友好協力 40 周年を記念する公演事業の1つとして、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール、日本の計5カ国の舞踊家と演奏家が参加してコラボレーションする「MAU: J-ASEAN Dance Collaboration」プロジェクトを企画・制作しました。演出・舞台構成は、歴史ある日本舞踊<宗家藤間流>八世宗家・藤間勘十郎氏が手がけ、舞台セット、楽曲、幕間の演出や立廻り場面など随所に歌舞伎の演出技法を駆使した舞台です。ASEANの参加者は、出身国における伝統舞踊の経験を有する若手中心の舞踊家・演奏家で、もちろん歌舞伎演出による舞台の経験はありません。ワークショップ(2013年6月、東京)、舞台セットを組んでの本格的なリハーサル(2013年8月、埼玉)を経て、公演ツアー初演の地となるインドネシアで行なわれた直前のリハーサル(2013年11月、ジャカルタ)で最終的に舞台が完成しました。

公演は、ジャカルタを皮切りに、マニラ、クアラルンプール、シンガポールの4都市を巡回し、訪れた多くの観客を魅了しました。

MAUプロジェクトは、ASEAN各国の歴史・文化を背景とする伝統舞踊と日本の歌舞伎舞踊が1つの舞台にাগり、それぞれの特徴を活かしながらも、公演全体としてはまさに歌舞伎公演と言える、他に類を見ないアジア舞踊のコラボレーション作品となりました。



■「Media/Art Kitchen」展

日・ASEAN 友好協力 40 周年を記念する美術事業として、日本と東南アジアの若手キュレーターとアーティストの協働作業によるメディア・アートをテーマとした展覧会「Media/Art Kitchen - Reality Distortion Field」を、2013年9月から2014年2月にかけて、ジャカルタ(インドネシア国立美術館、KINEFORUM)、クアラルンプール(Black Box, Map KL, Art Row, Publika)、マニラ(アヤラ美術館、98B COLLABoratory, Green Papaya Art Projects, Benilde School of Design and Arts)、バンコク(バンコク芸術文化センター)の4都市で順次開催しました。7カ国から13人のキュレーターが参加し、日本及び東南アジア各都市でのリサーチと、東京での2回の企画会議を経て、今日のメディア・アートの在り方とその可能性をテーマにプロジェクトを構想しました。

本展は、展覧会、ワークショップ、ラボラトリーの3つのプログラムを柱に、各開催都市の現地事情を反映した内容で構成され、日本と東南アジアから参加したアーティストは約70人・組を数えました。各会場で展示された多くのインタラクティブな作品、またアーティストによるワークショップやトーク、ライブパフォーマンス等を通して、来場者は身近なメディアやテクノロジーが生み出す多様な表現を驚きと発見をもって楽しみました。また、参加したキュレーターたちは、4都市で展覧会を作り上げるプロセスそのものを重視し、インターネットを介した様々なコミュニケーション手段を駆使して議論と調整を重ね、各地でのプロジェクトの進捗が日々更新される特設ウェブサイトを活用しました。本事業で培われた日本と東南アジアのキュレーターやアーティストたちの協働の経験とネットワークは、この地域の芸術交流の基盤を築くという意味で、極めて意義あるものとなりました。

世界共通の課題への取組み

国境や言葉を越えた共感を生むことができる文化・芸術の力を活かし、世界と共に手を携えて、災害からの復興、平和構築、環境問題等のテーマに向き合うことを目指し、事業を実施しています。

■ 日中韓で作り上げる演劇「祝／言」

東日本大震災の傷跡も生々しい2012年、「3.11」とどう向き合っていくことができるかをテーマに、このプロジェクトはスタートしました。更に、東アジアで隣り合う国々である中国、韓国と共に、新しい文化芸術を共同制作することも第2の重要なテーマでした。これらの思いを青森県立美術館芸術総監督長谷川孝治氏を中心としたチームと共有し、その重いテーマに真正面から対峙し、新しい戯曲を書き上げることとなりました。

このプロジェクトには、被災した宮城、岩手、福島の前演者・演奏家、そして、中国、韓国の演劇人・演奏家が参加しました。各地の調査及びイベントを経て、2年をかけた交流・共同制作の中でプロジェクトが形作られました。被災地からの参加者が震災の体験・記憶に真正面から取り組むこと、そして、中国・韓国からの参加者がこの難しいテーマの作品に関わることは、並大抵のことではない相当の勇気と覚悟、葛藤を伴う作業であったでしょう。しかし、それぞれが大きな葛藤を抱えつつ記憶・思いと向き合い、国を超えて体験を共有することで、強い共感や同胞意識、互いをリスペクトする精神が生まれ、説得力・訴求力に優れた作品が生まれました。

作品は、2013年から2014年にかけて3カ国の8都市（青森→仙台→大田→ソウル→全州→上海→東京→北京）で計25回公演を行い、4,500人を超える観客の深い共感を得ました。更に再演を強く望む現地の要望を受け、早くも2014年に北京で再演が決定しています。



■ 宮城ーニューオリンズ青少年ジャズ交流

2011年4月、東日本大震災の津波で楽器が流されてしまった気仙沼に、ジャズの故郷ニューオリンズから新しい楽器が届きました。2005年にハリケーン・カトリナの被災者に義援金を送った日本のジャズファンへのプレゼント、まさに「ジャズの恩返し」です。

遠く離れた宮城県とニューオリンズが、自然災害を機に思わぬ音楽の絆で結ばれ、互いの温かい思いやりへの感謝、そして復興への期待を共にしました。そしてここから、「宮城ーニューオリンズ青少年ジャズ交流」プロジェクトが生まれたのです。2012年秋にニューオリンズの若きジャズメンが宮城県石巻市、気仙沼市、仙台市を訪問。各地で同年代のジャズバンドと共演を行い、本場のジャズとエールを東北の被災地に届けました。

そして2013年夏。今度は宮城県気仙沼のジュニアジャズオーケストラ「ザ・スウィング・ドルフィンズ」のメンバーがジャズの聖地ニューオリンズを訪問しました。現地の中学や高校、ジャズの祭典「サッチモ祭」、ライブハウスでの公演及び交流会はどれも大盛況で、あふれる笑顔と質の高い演奏、そして心温まるメッセージに観客が沸きました。気仙沼の子供たちは地元テレビ局のモーニングショーでの生演奏後、すっかり有名人となり、通りすがりの人にハイタッチを求められるほどの人気ぶり。ニューオリンズ市議会議長からメンバー全員に感謝状が手渡される等、一躍ヒーロー、ヒロインとなりました。

宮城県でもニューオリンズでも、復興への道のりはまだ続いています。「新たなまちづくり」に取り掛かる時、社会の中心として力を発揮するのは若者です。ジャズを通じ、自らの夢や愛する故郷の未来を語り合いながら、交流が末永く続くことが期待されます。

■ 第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展

日本館は、田中功起氏による「abstract speaking - sharing uncertainty and collective acts (抽象的に話すことー不確かなものの共有とコレクティブ・アクト)」展を開催しました(キュレーターは東京国立近代美術館美術課長の蔵屋美香氏)。

東日本大震災からの復興をテーマとした2012年のヴェネチア・ビエンナーレ建築展(伊東豊雄コミッショナー／金獅子賞受賞)の展示物を一部残した会場には、映像、写真、日常品、成果物が1つのインスタレーションとして配置されました。多数の人々が協働で作業(例えば、髪を切る、詩を作る等)を行なう様子をとらえた映像作品により、東日本大震災後の社会をどのように共同で作っていきけるのかという問いが、見る人それぞれの中にゆっくりと浮かび上がる内容となりました。多くの来場者の共感を呼び、日本館は同美術展において初めて、「特別表彰」を受賞しました。



撮影：木奥恵三

日中交流センター事業

日中交流センターは、日本と中国の次代を担う若い世代の交流、相互理解を促進するため、2006年に設立されました。中国の高校生を約11ヵ月間日本に招き、日本人と同じ学校・家庭生活体験を提供する「中国高校生長期招へい」、中国国内で日本の雑誌、漫画、音楽など最新情報を紹介する「ふれあいの場」の設置・運営、大学生など若者同士の交流のための派遣・招へい、情報共有・連携強化のための「心連心ウェブサイト」運営等、様々な切り口の事業を通じて日中間の青少年交流を進め、顔と顔の見える関係を築いています。

「中国高校生長期招へい」事業の第1期から第7期までの修了者累計237人のうち、2013年度末までに95人（約4割）が大学進学等の目的で再び来日しています。また大学生や社会人になった後、大学生交流や「ふれあいの場」主催のイベントに積極的に参加している修了者も数多く、事業終了後も息の長い交流が育まれています。



■ 新規「ふれあいの場」オープン

2013年には中国国内で11、12番目となる「昆明ふれあいの場」と「済南ふれあいの場」がオープンしました。済南の開設計念イベントでは多くの来場者を前に、日本と中国の大学生が共同で体験型の日本文化紹介を行いました。

各「ふれあいの場」では、現代の日本文化に触れる機会を提供する他、定期的に文化交流イベントを実施しています。2013年度は成都、広州、重慶、昆明で、日本の大学生グループの企画による伝統と現代を織り交ぜたバラエティー豊かな交流イベント



「昆明ふれあいの場」で初めての大学生交流イベント

を開催しました。

これら「ふれあいの場」での活動の様子は、日中交流センターが運営する「心連心ウェブサイト」(<http://www.chinacenter.jp/>)で発信しています。

■ 日本での留学生生活を振り返り

2013年8月末に来日した「中国高校生長期招へい」の第8期生30人は、日本全国各地の高校で留学生生活を開始して半年が経過する2014年2月、大阪に集まり中間研修に臨みました。

研修では、日本の生活で成長したこと、つまづいていること等、一人ひとりが胸の内を語りながら、留学生活の前半を振り返りました。生活習慣の違いや言葉の壁、コミュニケーションの方法など様々な悩みを打ち明ける一方で、日本で親友と呼べる存在を得たこと、ホストファミリーと実の家族のようにうち解けることができたこと等、嬉しい報告も多数ありました。

研修には本事業の第1期生の先輩も駆けつけて、後輩たちに自身の体験を語ってくれました。先輩のアドバイスを聞きながら、残りの半年をどのように過ごしていけば、より実りの多い日中交流になるのかを話し合い、気持ちを新たにそれぞれの生活地へと帰っていきました。

■ 日本人高校生が「広州ふれあいの場」を訪問

「中国高校生長期招へい」受入校の日本人高校生20人が、より双方向的な日中の青少年交流を目指すため、2014年3月に中国を訪問しました。

まず広州を訪れた一行は、中山大学日本語学科の学生と共に、現地の日系企業（広州ジャトコ社、広州ヤクルト社）、「広州ふれあいの場」を訪問、対話を通して現地の生活や人の考え方に触れました。深圳外国語学校では、現地高校生の生活に密着し、寮生活、キャンパス・授業見学等を通して日本との違いを実感。手作りの交流会や学生宅でのホームステイで中国人の温かさに触れ、深い友情を育みました。また、上海では「中国高校生長期招へい」修了者たちと一緒に現地を観光しました。

今回の旅を通して、日本では知ることのできない等身大の中国に触れ、級友の住む国・中国をより身近に感じるようになりました。



深圳外国語学校の生徒と一緒に切り絵で「双喜」の字を作りました



Japanese-Language Education Overseas

海外における 日本語教育

より多くの人々に日本語を学ぶ機会が与えられるように、
そして、日本語学習を長く継続できるように、
日本語をより学びやすく、より教えやすいものとするため、
日本語教育の基盤や環境の整備を行います。
また、各国・地域の政府や自治体、教育機関等と連携して、
それぞれの教育環境、教育政策、学習者の目的や関心に
十分に対応した事業を行います。





海外における日本語教育事業の概要

海外における日本語普及のための 基盤・環境の整備

日本語を更に多くの人々に学んでもらえるよう、日本語を世界のどこにおいても学びやすく、教えやすいものとするために、日本語教育の基盤や環境の整備に向けた事業を行っています。

>>>>P.23

国・地域の事情に応じた 日本語普及

教育環境、学習者の目的や関心、日本語普及上の課題は、国や地域によって、さまざまです。それぞれの国や地域の実情に合った日本語教育の支援を進めています。

>>>>P.27



「JF 日本語教育スタンダード」
の活用推進

JF日本語講座

インターネットを活用した教育ツール

日本語能力試験（JLPT）

日本語専門家の海外派遣

日本語教育支援プロジェクト

経済連携協定（EPA）に基づく
看護師・介護福祉士候補者の日本語教育

海外の教師・学習者を対象とした研修



海外における日本語普及のための 基盤・環境の整備

「JF 日本語教育スタンダード」の活用推進

言葉を通じた相互理解のためには、その言語を使ってどんなことができるかという「課題遂行能力」の向上と、様々な文化に触れることで視野を広げ、いかに他者の文化を理解し尊重するかという「異文化理解能力」の育成が重要です。この理念のもと、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価の仕方を考えるためのツールである「JF 日本語教育スタンダード」（以下、JF スタンダード）を開発し、その活用推進に向け日本国内外でのセミナー、研修会を通して、幅広い情報提供と利用方法の紹介等を行ってきました。

2013年度は『JF 日本語教育スタンダード 2010』第2版第2刷を対外発表し、前述のセミナー等で同冊子を配布しました。また、JF スタンダードのウェブサイトにて同スタンダード準拠コースブック『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）専用ページを開設・更新し、同ウェブサイトのユーザーに『まるごと』を紹介すると同時に、『まるごと』のユーザーにも同教材の基盤であるJF スタンダードの情報を提供しやすくしました。更に、『まるごと』の学習目標に対応した「JF まるごと Can-do」56件を「みんなの『Can-do』サイト」に追加し、同サイトのデータベースを拡充しました。

その他、JF スタンダード普及に関連するセミナー、ワークショップ、調査研究、シンポジウムなどに対し助成を行い、それらの事業においてJF スタンダードの具体的な活用方法・事例を説明・紹介するための講師派遣等を行いました。

■『まるごと 日本のことばと文化』市販化

『まるごと』は、日本語能力のとらえ方、レベル設定、目標設定と評価の方法等について、JF スタンダードに基づいて国際交流基金が開発したコースブックです。『まるごと』の名前には、ことばと文化を「まるごと」、リアルなコミュニケーションを「まるごと」、日本人のありのままの生活や文化を「まるごと」の3つの意味があります。これらの「まるごと」を込めた『まるごと 日本のことば

と文化』入門(A1)「かつどう」及び「りかい」を、2013年9月に市販化しました。

11月には東京で、12月には大阪で、『まるごと』の内容や同教材を使った教授法を紹介するセミナーも実施しました。

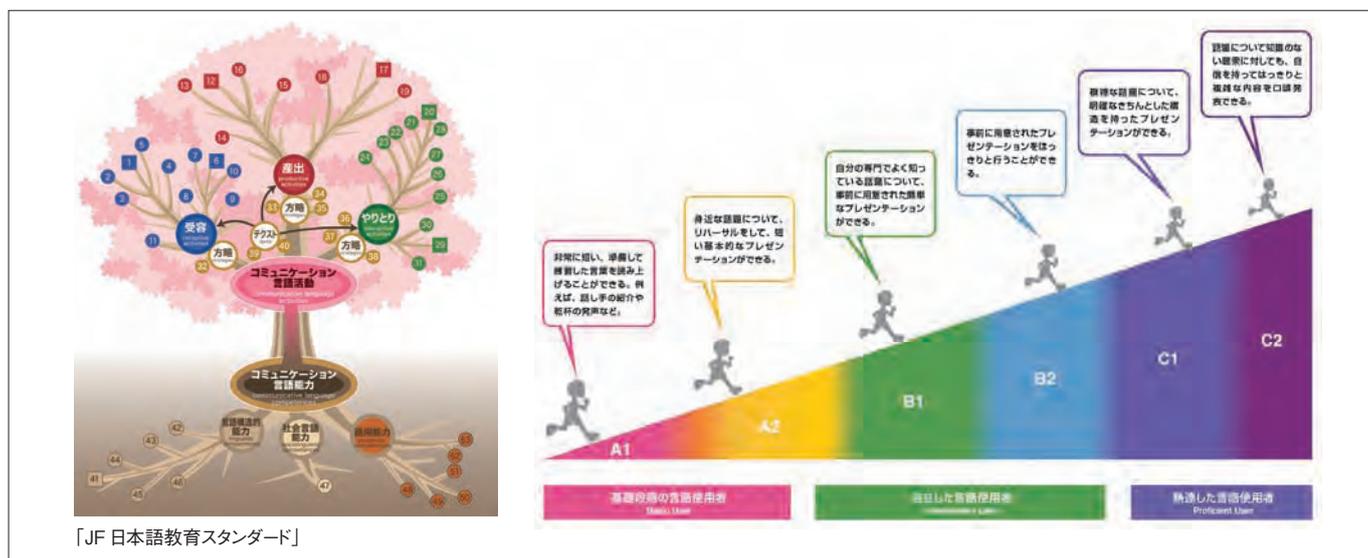
この『まるごと』の制作プロジェクトは、初級1(A2)、初級2(A2)および初中級(A2/B1)の市販化、そして中級1(B1)試用版の刊行を目指して進行中です。



市販『まるごと 日本のことばと文化』入門(A1)「かつどう」「りかい」



『まるごと 日本のことばと文化』入門(A1)刊行記念セミナー(大阪)



JF 日本語講座

JF スタンダードに準拠した新しいタイプの日本語講座を実施し、より学びやすく、教えやすい日本語の学習モデルを提示します。また言葉と文化の総合学習を重視し、日本語教育を通じた相互理解を推進します。

海外の日本語教育における新たなニーズに対応するため、2011 年度より一般市民を対象とした日本語講座（通称：JF 講座）の拡充を図っています。2012 年度の「日本語教育機関調査」の結果、海外の日本語学習者数の伸びに注目が集まりました。日本語学習の目的については、留学や就職という実利的な目的よりも、日本語そのものへの興味や、J-POP、アニメ・マンガ等ポップカルチャーを通して日本文化に親しみを感じ日本語を勉強してみたいという学習者が多く、前回調査より伸びていることがわかりました。

こうした現状を踏まえ、JF 講座では、JF スタンダードを取り入れた新たなカリキュラムを導入し、講座の充実とリニューアルに取り組んでおり、『まるごと日本のことばと文化』を用いた、今まで以上に日本文化理解に重点をおいた授業が行われています。2013 年度には、国際交流基金の海外拠点 23 ヶ所と、7 ヶ所の日本センターでそれぞれ JF 講座が開講され、延べ 16,000 人以上の学習者が受講しました。2014 年度も新たにカンボジアで講座を開講し、日本語と日本文化の総合的学習を推進していく予定です。

■文化日本語講座

JF 講座では、文化交流の総合的な実施機関である国際交流基金の特徴を生かして、語学の教室の外でも、音楽や映画、美術、料理など様々な日本文化に触れるイベントや日本に関する最新の情報、文化交流プログラムなどを提供します。これが、文化日本語講座です。JF 講座の受講者はこうした文化体験を通じて、日本という異文化への視野を広げ、より深く理解する力を身につけることができます。

ニューデリー日本文化センターでは 2014 年 2 月に、舞妓 2 人と女将によるレクチャーとデモンストレーション「舞妓さんと学ぶ日本語」を開催しました。日本舞踊や茶道お点前の披露の他、女将による花街のシステムや舞妓の衣装に関する説明、「京ことば」のレッスン、舞妓に直接質問ができる質疑応答など盛りだくさんの内容で、連日立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。

インドでは近年、日系企業が多く進出し、日本文化や日本語学習に対する関心が高まりつつあります。しかし実際に日本文化や日本人に直接触れる機会が少ないインドで、舞妓の舞や所作、言葉遣いを生で見て、感じるという体験は、インターネットやメディアを通してでは得られないものであり、多くのインド人の心に残る貴重な体験になったようです。



『海外の日本語教育の現状 2012 年度日本語教育機関調査より』の発行

国際交流基金では、世界の日本語教育の現状を正確に把握し、今後の施策に活用するため、3 年ごとに全世界を対象とした「日本語教育機関調査」を実施しています。調査の結果は、報告書にまとめて一般に公開しています。2013 年度には、2012 年度調査の集計及び分析結果をまとめた『海外の日本語教育の現状 2012 年度日本語教育機関調査より』（本冊）とその「概要」（日・英）及び「結果概要抜粋」を発行しました。

「結果概要抜粋」はウェブサイト（<http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>）でも公開しています。



インターネットを活用した教育ツール

日本語教師向けに、教材作成のための様々な素材や、教師間の情報交換の場を提供し、教師の日々の活動を支援するウェブサイト運営しています。また、学習者向けに、それぞれの学習目的に応じて利用できるウェブサイト運営しています。

■「まるごと+(まるごとプラス)入門(A1)」スペイン語版を追加姉妹サイト「まるごとのことば」を公開

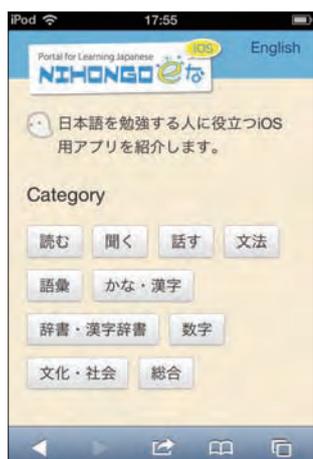
『まるごと 日本のことばと文化』の学習者向けサポートサイト「まるごと+ 入門(A1)」に、スペイン語版を追加し、日・英・西の3言語を揃えました。また、教科書で使われている語彙や表現をまとめた「まるごとのことば」サイトを新たに公開しました。「まるごとのことば」はローマ字でも表示、検索ができること、基本的なことばをまとめたイラストがダウンロードできる等、多くの日本語学習者に利用してもらえるよう工夫を施しています。



「まるごとのことば」トップページ

■「NIHONGO e な」iOS、アンドロイド・アプリも紹介

個人でスマートフォンやタブレットを持つことが一般的になり、時間や場所を選ばず、日本語の学習ができるようになってきました。「NIHONGO e な」では、日本語の学習や日本文化の理解を深めるのに役立つiOSやアンドロイド・アプリを紹介する「iOS版」「アンドロイド版」ページを追加公開しました。今後も、日本語の勉強に役立つコンテンツ情報の配信を続けていく予定です。



「NIHONGO e な iOS版」トップページ

■「アニメ・マンガの日本語」ますます利用広がる

2011年度に全てのコンテンツが完成した「アニメ・マンガの日本語」ウェブサイトには、フェイスブック等から訪れるユーザーも多く、口コミでもますます利用の輪が広がっています。また、国際交流基金の海外拠点等の「アニメ・マンガで日本語を学ぶ」といったテーマの日本語講座でも利用されています。



「アニメ・マンガの日本語」クイズ：誰のセリフ?

■WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」文化クイズ改訂

インドネシア語版とフランス語版の追加によって、利用者が更になりました。また「文化クイズ」に、現代日本に関するクイズや便利な機能を追加しました。他にも、「あいうえお表」のルビ付き版の追加公開等、更に多くの日本語学習者にエリンと一緒に楽しく日本語と日本文化に挑戦してもらえるよう、サイトの充実に努めました。



WEB版「エリンが挑戦!にほんごできます。」文化クイズ 第8課 日本の食べ物クイズ

■「みんなの教材サイト」継続的な素材追加

日本語教師を支援する「みんなの教材サイト」は、開設から11年目を迎えました。2013年度には新しい写真・イラスト・読解素材を随時追加した他、レイアウトを変更する等、充実を目指しました。



「みんなの教材サイト」：新規写真おしらせ (SNS 利用)

日本語能力試験（JLPT）

日本語を母語としない人を対象とした日本語能力試験（JLPT：Japanese-Language Proficiency Test、以下 JLPT）を世界各国・地域で実施しています。小学生から社会人まで幅広い層の受験者によって、語学の実力測定のため、就職や昇進のため、大学等への入学のためと、様々に活用されています。

■ 全世界で 57 万人が受験

JLPT は日本語を母語としない人の日本語能力を測定し、認定するための試験です。N1 から N5 までの 5 つのレベルの試験があり、受験者は自己の日本語能力に適したレベルを受験することができます。試験は、N1 と N2 は「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」と「聴解」の 2 科目、N3～N5 は「言語知識（文字・語彙）」、「言語知識（文法）・読解」、「聴解」の 3 科目で構成されています。試験問題の作成と海外各地での試験実施は国際交流基金が、国内での試験実施は共催者である公益財団法人日本国際教育支援協会が、行っています。

2013 年度は 7 月と 12 月の 2 回、試験を実施しました。実施状況は次の通りです。

・第 1 回（7 月 7 日）

海外 21 ヶ国・地域の 101 都市で実施。応募者約 23 万人、受験者約 20 万人。

国内 42 都道府県で実施。応募者約 6.5 万人、受験者約 6 万人。

・第 2 回（12 月 1 日）

海外 63 ヶ国・地域の 202 都市で実施。応募者約 28 万人、受験者約 24 万人。

国内 44 都道府県で実施。応募者約 7.5 万人、受験者約 7 万人。

■ 実施の拡大

本年度も実施国・都市・回数が増えました。新たな実施国としてアルジェリアとマダガスカルが加わり、それぞれアルジェとアンタナナリボで 12 月の試験を実施しました。また、インドネシアではこれまでの 7 都市に加えて新たにマナドで 7 月試験を、カンボジアではプノンペンに加えて新たにシェムリアップで 12 月試験を実施しました。ウズベキスタンのタシケントは年 2 回の実施になりました。

■ オンライン化の推進

日本語学習者にとって JLPT をより身近なものにするため、オンライン化を進めています。これまで日本国内と、韓国、中国等海外 10 ヶ国・地域でオンラインの受験願書受付を行ってきましたが、本年度は新たにオーストラリアとハンブルク（ドイツ）でオンライン受付を導入しました。海外の受験者と国内の受験者のオンライン出願者はオンラインで自分の試験結果を知ることができます。また、「日本語能力試験公式問題集」を聴解問題も含め JLPT の公式ウェブサイトでご覧しており、無料でダウンロードできます。

<http://www.jlpt.jp/samples/sample12.html>

■ JLPT による認定の活用

約 30 年の歴史を持つ JLPT は、国内外で大学入試や卒業、留学、就職、昇進・昇格等に当たっての認定の基準として、ますます活用されるようになってきました。高度人材ポイント制による日本の出入国管理上の優遇制度において、N1 合格者には従来 10 ポイントが付与されていましたが、2013 年 12 月より 15 ポイントが付与されています。

『JLPT 通信』第 2 号（2014 年 2 月発行）では、現在日本で活躍している過去の受験者たちが、JLPT による日本語能力の認定が就学や卒業、就職等の際に条件であったり有用であったりしたこと、今の学業や仕事につながっていること等を語っています。

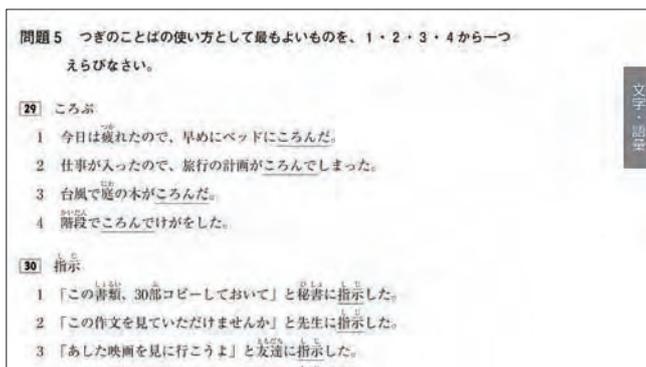
<http://www.jlpt.jp/reference/jlptbulletin1.html>



中国での試験風景



タイでの試験風景



日本語能力試験公式問題集（N3）より

国・地域の事情に応じた日本語普及

日本語専門家の海外派遣

■ 世界 40 ヶ国で 124 人の日本語専門家が活躍

海外各国における日本語教育の定着と自立化の促進を目的に、各地に日本語専門家を派遣しています。2013 年度は 40 ヶ国に、124 人の専門家を派遣しました。派遣された専門家は、現地教師の育成、カリキュラム・教材の作成や教師間ネットワーク構築への支援、教室での日本語教授等、派遣先機関・国における安定的な日本語教育の実施や質的改善のための業務を行っています。

派遣先の 1 つであるメキシコでは、日本語専門家が国内外を巡回し、日本語教授法や JF スタンダードに関する教師のための研修会を多数実施しました。更に、日本語能力ブラッシュアップの機会や日本語の教え方に関する情報に乏しい中米・カリブ諸国の日本語教師の要望に応えるため、インターネットを介した講座「ハプロ・エンリネア」(メキシコ・中米・カリブの教師のためのオンライン日本語)を実施しました。「ハプロ」は、教室と遠隔地の先生方をオンラインで結んだ JF スタンダード準拠の日本語講座と、当地の先生方による発表や日本での研修の報告セミナーです。これらをライブ配信し、広大な中米・カリブ地域の各地で活動する日本語教師の方々の、幅広いニーズに応える活動を展開しました。



メキシコで活躍する日本語専門家

日本語教育支援プロジェクト

■ 世界 126 機関に拡大した「さくらネットワーク」

JF にほんごネットワーク(通称:さくらネットワーク)は、世界各地の日本語普及と日本語教育の質の向上を目的とする海外の日本語教育機関を繋ぐネットワークです。国際交流基金の海外拠点に加え、

周辺地域への波及効果の高い日本語事業を実施している機関・団体(大学や日本語教師会等)をメンバーとして認定しており、メンバー数は 2008 年 3 月発足時の 31 ヶ国 39 機関から、2013 年度末には 47 の国・地域の 126 機関にまで成長しています。

このネットワークのメンバーが申請できるプログラム「JF にほんご拠点事業(助成)」(通称:さくら中核事業)を通じて、メンバー所在国や地域への日本語の普及・拡大・発展につながる波及効果の高い事業を実施・支援しています。更に、国際交流基金の海外拠点のない国に向けた「日本語普及活動助成」プログラムにより、教材購入、講師謝金、スピーチコンテストや会議・シンポジウムの開催への助成を行う等、各国・地域のニーズに対応したきめ細かな日本語教育支援を行っています。

2013 年 6 月にブルガリアで開催されたバルカン半島日本語サマーキャンプも、さくら中核事業の成果の 1 つです。同キャンプには、ブルガリアに加えて、トルコ、ルーマニア、セルビア、マケドニアの 5 ヶ国の大学から 47 人が参加しました。日本語の授業に加え、書道、マンガ・アニメ等の日本文化に触れる機会もあり、参加者は日本語を含めた日本文化への理解を深めるとともに、近隣諸国で同じ日本語を学ぶ他の学生との交流を深めることによって、互いに切磋琢磨し成長していく貴重な機会を得ました。学習モチベーションの維持・向上にも寄与するこのようなネットワークを重視し、今後も広域的な波及効果の高い活動を支援していききたいと思います。

経済連携協定(EPA)に基づく

看護師・介護福祉士候補者の日本語教育

インドネシア、フィリピンと日本との二国間経済連携協定(EPA)に基づき、日本に受け入れる看護師・介護福祉士候補者を対象として、来日前の日本語予備教育事業(6ヵ月間)を両国で実施しました。事業の内容は、基本的な文法・語彙・会話を習得する日本語授業から、日本の社会・生活習慣等の基礎知識を習得する社会文化理解プログラムまで、多岐にわたります。候補者は、来日して病院や介護施設に配属された後は、仕事をしながら国家試験合格を目指すことになるため、効率的な学習習慣を身につけておく必要があります。そのため、本事業では自立学習支援にも力を入れ、候補者が自らの学習を計画し、振り返り、評価する訓練も行いました。

国内連携による日本語普及支援

国際交流基金では 2009 年度より、日本語教師養成課程を有する日本国内の大学と連携して、日本語教育を専攻する学生をインターンとして海外へ派遣しています。2013 年度は国内 43 大学から 346 人を派遣しました。

また、これと連動して、日本の大学からインターンを受け入れる海外の大学から、学部学生を招へいして関西国際センターで訪日研修を実施しています。この研修は、日本語学習や対日理解の機会を提供すると同時に、大学間の連携強化の支援を目的としています。2013 年度は、「夏季特別」、「夏季」、「秋季」、「冬季」の計 4 回を実施し、延べ 25 ヶ国から 127 人が研修に参加しました。

海外の教師・学習者を対象とした研修

■ 海外の教師を対象とした研修（日本語国際センター）

日本語国際センターでは2013年度に20のプログラムの日本語教師研修を実施しました。参加者は、60の国・地域から511人にのぼります。

「海外日本語教師日系人研修」は、中南米地域の日系人に日本語教育を実施している教育機関の、日系人日本語教師を対象に実施する研修です。2回目となる2013年度は、ブラジル、ベネズエラ、ペルー、ボリビアの4ヵ国から9人が2ヵ月間の研修に参加しました。年少者から成人まで幅広い層を対象に、日本語と同時に文化についても教えることの多い現地教育機関の現状を踏まえ、授業やカリキュラムの改善方法を考えました。現代の日本の社会や文化を実際に体験し、情報を収集し、それを自国での教育の中で生かす方法を考える「プロジェクトワーク」を、日本人大学生との協働作業も含めて行いました。また、三重、浜松で国内の日系人対象の学校を訪ね、JICA横浜の日系研修参加者と合同ワークショップを実施しました。参加者はこの研修で、世界全体における中南米の日本語教育を多くの視点で見直すと共に、日系人として自らが現場で担う役割を再認識し、今後日本語教育の充実と発展にますます貢献していくことでしょう。



海外日本語教師日系人研修

いま、東南アジア諸国では中等教育レベルでの日本語学習が大きく進展しています。同時に、「自分で学び、成長する力」「協働力」「自ら考える力」「発表力」等、これからの社会で求められる能力の育成が、学校教育の大きな目標として掲げられるようになりました。こうした目標を日本語教育のなかでどのように実現するのか、2013年9月、公益財団法人かめのり財団との共催で「にほんご人フォーラム」を開催し、考察しました。対象はインドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシアに日本を加えた6ヵ国で、高校生24人と中等教育レベルの教師11人が集まりました。高校生たちは、多国籍のグループに分かれて「便利なもの、その問題点と改善点」というタスクに取り組めます。生徒たちが協力しあって調べ、議論し、成果を発表する過程を教師が観察し、学びの実態を教案に反映させる作業に取り組みました。今後も中長期的な視野で「にほんご人フォーラム」を進めていきます。

■ 海外の学習者を対象とした研修（関西国際センター）

1997年に大阪府に設立された関西国際センターでは、職業上、日本語能力を必要とする海外の専門家を対象とした「専門日本語研修」と、海外で日本語を学ぶ大学生・高校生等を対象とした「日本語学習者訪日研修」を実施しています。2013年度は、104の国と地域から684人が研修に参加しました。

東日本大震災を受けて2011年に開始した「米国JET記念高校生訪日研修」事業では、全米各地から選抜された高校生32人が、JETプログラムにより来日していた米国人2人が亡くなられた石巻市、陸前高田市を訪問し、遺族や縁のあった人々の支援のもと、「日米高校生サミット in 陸前高田 2013」をはじめとする交流活動に参加しました。

2013年度には他機関との更なる連携拡大に努め、和歌山大学、大阪大学に加え、関西学院大学とも連携協定を締結し、研修生の大学講義への参加、特別講義・留学セミナー開催といった包括的な大学紹介・交流プログラムを拡大しました。また新たに、堺市議会、皇學館大学、伊勢神宮、東芝未来科学館、オムロンコミュニケーションプラザや国際日本文化研究センターにおける講義等を研修プログラムに加えました。

関西国際センターでは受託研修事業の拡大にも力を入れています。その一例として、2011年度に外国政府の外交官・公務員を対象とする研修に参加したカタールの外交官が、研修後に本国のカタール政府に働きかけたことで、2013年度に同国政府から青少年の研修事業を受託しました。



カタール青少年訪日研修 広島研修旅行



Japanese Studies and
Intellectual Exchange

日本研究・ 知的交流

海外での日本研究を支援し、その振興を図ることで、
世界の各国で人々に日本がより深く理解されることを目指します。
また、国際的な重要課題、共通の関心事項について、
日本と海外の人々の間で対話する機会を作ることで、
日本の対外発信を強化すると共に、将来の対話や交流事業の
中心的な役割を担う人材を育てるための
事業を推進します。





日本研究・知的交流事業の概要

海外の日本研究の促進

各国で日本人と日本社会への理解が深まり、日本との良好な関係が維持・発展されるよう、日本研究を担う中核的な機関、教授層から大学院生までの研究者、そして研究者間ネットワークを支援しています。

>>>P.31

知的交流の促進

多層的、多角的な国際相互理解を推進し、世界の発展と安定に向けた知的貢献を目指します。

>>>P.33



日本研究機関への支援

日本研究者への支援

日本研究ネットワーク促進

知的対話・対外発信の強化

人材の育成

米国との知的・草の根交流

地球規模の課題への取り組みにおける日本と米国の連携とパートナーシップの構築、人材育成、ネットワーク形成等で、日米関係の基盤強化を図ります。

>>>P.34

米国との青少年交流

相互理解の深化、交流の担い手層のネットワーク形成、並びにグローバル人材の育成を推進します。

>>>P.36



日本研究機関への支援

海外の各国・各地域で日本研究の拠点となっている大学の学科・コースや研究センター等に対し、基盤の強化や専門人材の育成のための支援を行っています。支援の内容は、各機関のニーズに応じて、研究や国際会議、教員ポストの拡充、図書整備、訪日研修、出版等への経費の助成や、客員教授の派遣など様々な形をとります。こうした包括的・継続的な支援により、海外での日本研究の長期的な発展・拡大を図っています。

■ チュラロンコン大学（タイ）

チュラロンコン大学の日本語・日本文学専攻修士課程の学生に対して日本の近現代文学に関する講義を実施するために、日本から近代文学の専門家を客員教授として派遣しました。講義では、谷崎潤一郎の代表的な2作品を取り上げ、それぞれの作品講読を通じて、日本の近代と近代文学について、近代文化の舞台となった都市空間における消費文化の観点から考察しました。更に作品の舞台となった東京と関西という2つの都市文化の差異についても検討しました。通常の授業のほかに、「村上春樹と1980年代—若者たちのアメリカ—」と題する特別講演会も実施しました。

また、修士課程の学生3人を対象に、タイでは入手困難な修士論文執筆に必要な図書資料を収集し、日本の大学教員による論文指導を受けるための約2週間の訪日研修を実施しました。3人は大阪大学で実施された研究会にも参加し、それぞれの研究テーマについて発表を行いました。



チュラロンコン大学での客員教授による講義

■ アインシャムス大学（エジプト）

アインシャムス大学外国語学部は、エジプトにおける文科系トップクラスの難関で、2000年に設立された日本語学科の学生の日本語能力は高い水準にあります。国際交流基金では、同学科の大学院生や学部学生に対する論文執筆や研究方法の指導と日本文化・社会に関する講義のために、日本人専任講師の雇用を援助し、より質の高い教育内容の実現を図りました。



■ 北京日本学研究中心、北京大学現代日本研究センター（中国）

北京日本学研究中心は、中国における日本語・日本研究、日本との交流に携わる人材の養成を目的として、国際交流基金及び中国教育部の合意により1985年に開設されました。現在は、北京外国語大学と国際交流基金が共同運営しています。2013年度には、日本研究専攻大学院生に対する講義と指導のため、9人の日本人研究者を短期派遣した他、修士課程学生10人を約4ヵ月間、博士課程7人を1年間、研究のため日本に招へいしました。また、36人に修士号、3人に博士号を授与しました。

北京大学現代日本研究センター課程は、現代日本に関する適切な知識と専門的知見を備えた中国人専門家を養成することを目的として、北京大学と国際交流基金が共同運営しているものです。2013年度には社会科学系の博士課程学生延べ40人に対し、専門的な日本研究の講義指導を行いました。日本から10人の研究者を講義のために短期派遣した一方、受講生19人を15日間、訪日研修に招へいしました。



北京日本学研究中心卒業式

日本研究者への支援

海外で日本について研究する研究者に対して、日本に滞在して研究や調査を実施するための研究奨学金（フェローシップ）を供与しています。人文科学と社会科学の分野の日本に関する研究が対象で、短期滞在、長期滞在のフェローシップ、また、特に博士論文を執筆するためのフェローシップもあります。全世界から公募で選ばれた多くの日本研究者が、国際交流基金のフェローシップを受けて日本での研究を行っています。

2013年度にフェローシップ期間中にフェローが国内の研究会などで発表を行った数は、報告されただけでも227件に上ります。例えば、イタリア出身のフェロー、ジュリオ・プリエセ氏が、『中央公論』の紙上で著名な学者と議論したことは代表例として挙げられます（『中央公論』2013年6月号、「紙上討論『日本が軸をおくべきは米国?中国?』」ロナルド・ドーア×ジュリオ・プリエセ、ジャッジ：エズラ・ヴォーゲル）。また、ハンガリー出身のユリア・ネーマ氏は、国際交流基金が海外巡回展「美しい東北の手仕事展」の開催に合わせて実施した講演会及び展示ツアーにおいて、フェローとして日本で陶磁器の研究を行った経験を踏まえた説明を行いました。2回の講演会とツアーに参加した多くの人々が、ネーマ氏の詳しく具体的な解説で展示への理解を深めました。フェローの専門性を活かし、他の事業との間に相乗効果を生んだ事例といえます。

2014年1月に東京で開催したフェロー懇談会では、フェローシップにより日本に滞在中の研究者約75人が一堂に会し、様々な学問分野で日本について研究する各国の研究者間で活発な情報交換とネットワーク形成を行いました。



フェロー懇談会

日本研究ネットワーク促進

諸外国の日本研究者間の所属機関や国を超えたネットワークの構築、また、各地域あるいは国の日本研究者間の学会やネットワーク活動の支援を行っています。研究者間のネットワークを強化することで、海外の日本研究の発展を促すことを目指しています。



ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）京都会議

■ 中央アジア日本研究セミナー

日本に関する情報が豊富には普及していない中央アジアにおいて、若手研究者や日本語学習者、そして日本を含む国際関係に関心を持つ学生を対象に、最新の日本の状況と方向性に関する講演会を開催しました。

2000年代初頭にウズベキスタンで日本国大使として活躍し、中央アジアに関する調査や発表を続けている評論家の河東哲夫氏を講師として派遣。中央アジアへの造詣が深く、米国、西ヨーロッパ、ソ連・ロシア等で外交官としての勤務経験が豊富な同氏は、「蘇りつつある2011年大震災後の日本—アジアにおけるその役割」という題目で、東日本大震災の諸側面に触れつつ、現代日本の政治・経済・社会の状況を詳しく解説しました。

講演は、ウズベキスタン、キルギス、カザフスタンの3カ国の首都で、若者を中心に強い知的好奇心をもって迎えられました。どの会場でも、日本への関心の強さが窺われる多くの質問が寄せられ、限られた時間の中で熱心なやり取りが展開されました。単に日本の美点をアピールするのではなく、抱えている様々な課題も明らかにする手法をとったことで、中央アジアの人々の共感を得ることができました。今回の講演に参加して日本の最新情報に触れた若者たちが、将来様々な形で発信力をつけ、日本と中央アジアの相互理解の架け橋となっていくことが期待されます。



中央アジア日本研究巡回セミナー（キルギス）

知的対話・対外発信の強化

日本と各国の共通の関心テーマや国際的重要課題についての対話と人的交流を通じて、日本の対外発信と相互理解の強化、日本の知的国際貢献を促進しています。国際会議やシンポジウムの開催、人の派遣・招へいを行うと共に、内外の団体が企画する様々の会議・交流事業への助成も行っています。

■ シンポジウム「調和するアジア～文化交流の新時代」

日・ASEAN 友好協力 40 周年にあたり、日本政府が「対 ASEAN 外交 5 原則」を発表して ASEAN 外交重視の政策を打ち出すなか、国際交流基金は日本経済新聞と共催し、日本と東南アジアの著名文化人による一般公開シンポジウムを 2013 年 10 月に東京で開催しました。本シンポジウムに先駆け、有識者によるアジア文化交流懇談会から安倍首相に対し、アジアとの今後の文化交流に関する理念が提言されましたが、本会議はその提言と呼応する議論を行うことで、提言の具現化に向けた環境づくりの一助となることを目指したものです。

シンポジウムでは、冒頭の安倍首相挨拶に続き、司会の山内昌之・東京大学名誉教授を中心に、佐藤忠男氏（映画評論）、野村萬斎氏（狂言）、オン・ケンセン氏（舞台芸術／シンガポール）、クリスティン・ハキム氏（映画女優・製作／インドネシア）他のパネリストが、日本とアジアの新たな文化的協力について自由な討論を行いました。会議の内容は日本経済新聞で大きく紹介され、アジアとの交流の意義を広く発信する好機となりました。



撮影：高木あつ子

■ ラーパイ・センロー氏の初来日

ミャンマーで最大の市民団体「メッタ開発財団」の創立者であるラーパイ・センロー氏を日本に初めて招へいしました。同氏は、少数民族でありながら、長年にわたって軍政、反政府勢力双方との協働を模索し、武力紛争や自然災害によって傷ついたコミュニティの再生に取り組んできた功績が認められ、2013 年にアジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞を受賞しています。

国際交流基金本部で開催した講演会「ミャンマーの未来を拓く～全ての人々に平和と恩恵を～」でラーパイ・センロー氏は、これまでの自身の活動とミャンマーの政治・社会的変化にみる希望と課題を説明しました。聴衆からは、「ミャンマーの最新の状況について少数民族の代

表から話を聞く好機会となった」、「政治的偏りのない視点での率直な語りが印象的だった」等の意見が寄せられました。更に、マスコミの紙面などで日本の人々に向け、争いで疲弊した少数民族への教育支援や紛争解決には中立と透明性が重要であると語りました。関係省庁や財団の関係者と会合を持つ等、滞日期間を通して精力的に日本の人々と交流して相互理解を深め、様々なネットワークを形成しました。



人材の育成

日本と諸外国の間の対話や、地域間、あるいは若者同士の交流等で中心的な役割を果たす人材の育成を目的に、様々な交流事業に対して助成を行います。また、日本との交流が少ない中東、アフリカ等の地域の研究者やジャーナリスト等に対し、日本で研究や調査を行うためのフェローシップを提供しています。

■ 福島・中国高校生友好交流事業「あいのみ」

一般社団法人 Bridge for Fukushima が主催する、福島県内の高校生計 13 人のグループが中国・上海を訪問して中国の高校生と交流を行う事業を支援しました。

参加した福島の高校生には、自ら中国を訪ねて交流することにより、視野を広げる貴重な機会となりました。他方、中国側の学生の 1 人は、「いまだ 10 万の福島の方々が家に帰ることができないという事実にとっても驚き、お見舞いの気持ちを感じています。・・・福島を復興させる仕事にとっても関心があり・・・大学卒業後は自分で実際に行動を起こし、福島の助けになりたいと願っています」と、交流に参加した感想を寄せてくれました。

この事業の特徴は、福島県の高校生たちが主体的にプロジェクトを計画したことでした。今後の定期的な交流に向けた準備も整えており、将来に向けた発展が期待されます。



日米センター事業

日米センター (Center for Global Partnership: CGP) は、国際社会が直面する重要な共通課題を解決するため、日米両国が世界の人々と共に知恵を出し合い、協力していく必要があるという考えから、1991年に東京とニューヨークに設立されました。

日米センターは、以下の二つのミッション (目的) を掲げて活動しています。

- 日米両国が国際的責任を分かち合い、世界に貢献するため、世界的視野に基づく協力を推進する。
- 相互理解に基づく揺るぎない協力関係を実現するため、日米両国の各界各層における対話と交流を促進する。

日本と米国は、現代の国際政治・経済において共に大きな役割を担っています。日米センターは、両国が重要な役割を果たすべき地球規模の課題への取り組みや、それらの課題解決のための連携やパートナーシップの構築を目指す事業を実施・支援します。また、日米の各分野で次世代を担うことが期待される人材の育成やネットワークの形成等、日米関係の基盤強化を目的とした事業を支援しています。

■米国アジア専門家招へい事業

2010年の日米首脳会談後に発表された「日米同盟深化のためのアクションプラン」の1つとして、日米センターは2011年度より、米国の大学やシンクタンク等に所属し日本以外のアジア地域を専門とする研究者を対象に、「アジア専門家招へい事業」を実施しています。

第3回となる2013年度には、6人の在米アジア専門家が来日しました。一行は、東京で官庁・公的機関から日本政府の対アジア政策や日本を巡るアジア情勢等についてブリーフィングを受けた後、マスメディア関係者との意見交換、アジア地域を専門とする日本の大学院生との対話セッションや難民支援に取り組む日本のNPO訪問等に臨み、現在の日本の政治・政策・社会状況に対する理解を深めました。

本事業によって、米国で活躍するアジア専門家の関心領域や問題意識に「日本」を新しくインプットすると共に日本の政府関係者や研究者との交流・対話の機会を提供することにより、日本の理解促進や新たなネットワークの構築を図っています。

■米国国際関係論専攻大学院生招へいプログラム

将来の日米関係の深化と発展に重要な知日派の育成を目的として、米国の大学院で国際関係を専攻する優秀な大学院生を日本に招くプログラムを実施しています。このプログラムは国際関係専攻大学院連合 (Association of Professional Schools of International Affairs: APSIA) と共催しており、2013年度は同連合の米国における加盟機関から選抜された大学院生15人が参加しました。

東京で専門家による講義を受けて日米外交史や安全保障、エネルギー政策についての知識を得た後、外務省、在日米大使館、防衛大学校及び米軍横須賀基地を訪問した他、NPOの若手・中堅職員や大学院生と意見交換を行いました。また個別研究日には国際開発、エネルギー・環境、安全保障、政治経済の4グループに分かれて、各分野の専門家を訪問し、リサーチを行いました。

東北地方に移動し、宮城県岩沼市の復興状況を視察した後、仙台空港と陸上自衛隊仙台駐屯地を訪れ、東日本大震災発生時の被害状況やトモダチ作戦の詳細についてレクチャーを受けました。

更に、広島での平和記念資料館、原爆ドーム、平和記念公園の視察、被爆者の体験談を聞くセッションを経て、最終日にはラップアップ・セッションを行いました。参加者がそれぞれの専門と知識を駆使し、今回の事業参加の意義と日本での体得・経験を共有することで、日本理解が一層広がり深まりました。



宮島を訪れた参加者たち



ラップアップセッション



早稲田大学の大学院生との交流

■ 日系アメリカ人リーダーシップ・セミナー

日系アメリカ人リーダー招へいプログラム（Japanese American Leadership Delegation: JALD）は、米国の日系人社会と日本との相互理解と交流を深めることを目的として、2000年に外務省によって開始されました。日米センターは2003年以降、来日した日系アメリカ人をパネリストに迎え、米日カウンシルとの共催により講演会等を開催しています。

2013年度は、日系アメリカ人が米国内のさまざまな地域で活躍している現状を踏まえ、移民の歴史と経験に基づく「地域の経済発展」と「リーダーシップ」をテーマに、在福岡米国領事館および福岡日米協会の協力のもと、公開セミナーを開催しました。

パネリストとして登壇したファースト・ハワイアン・バンクの法務担当上席副社長を務めるキャリア・オキナガ氏は、自身のルーツが福岡にあることに触れながらハワイ経済についてわかりやすく解説。マサチューセッツ州の州議会議員であるケイコ・オーラル氏は、日系アメリカ人による政治参画や自身の選挙活動、政治家としてのキャリアについて語りました。更にワシントン州のブラッド・ミヤケ氏は、ベルビュー市の助役代行として地域活性化を担う醍醐味や市の魅力について、具体的な事例と共に紹介しました。

セミナーの締めくくりには、日系アメリカ人と福岡県内外から集まった人々との間で活気に満ちた質疑応答が繰り広げられました。



■ JOI プログラム

JOI（ジョイ）プログラムは、米国の草の根レベルで日本への関心と理解を深めることを目的に、日本との交流の機会が比較的少ない米国の南部・中西部に、交流活動のコーディネーターを2年間派遣する事業です。

JOIはJapan Outreach Initiativeの略称で、日本語では「日米草の根交流コーディネーター派遣プログラム」。2002年度より米国の非営利団体ローラシアン協会と共同で実施しており、2013年度は第12期の新規コーディネーター5人を派遣しました。派遣中であった第10期の6人が任務を終えて帰国し、第11期の3人は2年目を迎え活動を続けています。

大学や日米協会をはじめとする地域交流活動の拠点に派遣されたコーディネーターは、その地域の小学校から大学までの教育機関、図書館、コミュニティセンター等を訪れて、日本人の生活ぶりや、伝統芸能、日本語など、日本の文化を幅広く紹介する活動を行います。

一例として第11期の湯田晴子氏は、バージニア州チェスターフィールド郡で外国語教育に貢献した人物に贈られる“Jane J. Baskerville Community Award”を受賞しました。日本文化に関する自身の豊富な知識を、派遣先の周辺地域にも足を運び精力的に紹介したことが高く評価されたものです。



KAKEHASHI プロジェクト

「KAKEHASHI プロジェクト」(KAKEHASHI Project -The Bridge for Tomorrow-) は、日本に対する潜在的な関心を増進させ、日本的な価値やクール・ジャパンといった我が国の強みや魅力等の日本ブランドへの国際理解を増進させることを目的として、政府（外務省）が進める青少年交流事業です。国際交流基金は、拠出先である日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）の委託を受けて、米国向け事業を実施しています。2013年度からの2年間において、中学生から若手社会人（35歳以下）までの青少年4,600人の短期交流（招へい事業、派遣事業各2,300人）を実施し、日米間の相互理解の深化、将来の交流の担い手層のネットワーク形成、並びに青少年層におけるグローバル人材の育成を推進します。

2013年度は、米国の青少年1,009人を招へいし、日本の青少年1,023人を派遣しました。

■ 中学・高校・大学生の招へい

全米で主として日本語を学ぶ中学・高校生 686人（30校）及び大学生 225人（9校）を学校単位で10日間招へいしました。一行は日本滞在中、日本舞踊や伝統美術等の伝統文化に加え、アニメやファッション等のクール・ジャパン、更には最先端の科学技術について、関連施設や専門家の訪問を通じて学びました。また、地方訪問プログラムでは、学校交流やホームステイを通じて、同世代の日本の青少年と日常生活を共にし、日本の人々と社会に対する理解を深めました。訪問した自治体数は延べ39都道府県に上り、日本の多様な地方文化の理解や地方とのネットワーク拡大効果も得ることができました。

参加者は訪問先各地で歓待され、日本の「おもてなし」文化や地方社会の連帯感、日本社会の効率性、町の清潔さ等に感銘を受け、実際に訪問してみなければわからない日本の多様な魅力を発見しました。「日本語や日本文化をもっと学びたい」、「日本での経験を家族や友人と共有したい」といった声も多く聞かれ、日本語学習や日本研究の意欲が更に深まり、将来の日米関係の架け橋となってくれることが期待されます。



関西での英語落語鑑賞

■ 若手研究者の招へい

日本の政策状況の理解増進及び知的コミュニティとのネットワーク形成を主目的として、ワシントン D.C. を拠点とする政策シンクタンクの若手研究者 98人（10機関）を10日間（一部は8日間）招へいしました。一行は、安全保障、経済、社会に関する概況説明を受けた後に、専門分野の関心に応じて、省庁、シンクタンク・大学、企業、NPO 等を訪問し、日本の政策状況に関する理解を深めました。

参加者からは、「米国の政策立案に携わる者として、国際社会における日本の役割と重要性を理解するために日本で得た知識を活かしたい」、「来日前は日本について限られた理解しかなかったが、多くの人々と話した結果、日本についての知識は格段に増えた」、「メディアで報道されない相手国の社会を理解するためには、今回のような交流がもっともっと必要と感じた」といったコメントがありました。今回の訪日をきっかけに、日本に対する関心をより一層高め、今後の研究活動に活かしていくことが期待されます。

■ 高校・大学生の派遣

各都道府県教育委員会の推薦を通じて全国から選抜された高校生 627人（25校）、公募により採用された中学・高校生 99人（4団体）及び大学生 236人（10校）を、学校・団体単位で10日間米国に派遣しました。芸術専攻の大学生を対象とする「学生クリエーター派遣」61人（3校）も併せ実施しました。

参加者は派遣に先立って、地元の文化、自然、産業等、日本の魅力をテーマとする英語でのプレゼンテーションを準備し、米国での発信に向けて練習を重ねました。ワシントン D.C.、ニューヨーク、ロサンゼルス等の大都市に加え、地方都市も訪問し、学校交流やホームステイを経験しながら、連邦議会議員や各地方の政府関係者等の指導層から、同年代の学生、教会等のコミュニティ・レベルまで幅広い層の米国人を対象に、日本文化の多様性や青少年の日常生活、更にクール・ジャパン等の現代文化についてプレゼンテーションを行いました。

参加者からは、「個人レベルでのひとりひとりの交流、つながりが、ひいては国と国との『架け橋』につながっていくのだと実感した」、「日本人が海外で活躍する機会が増えていくなかで、自分の国の魅力発信がいかに重要かを知ることができた」等の感想が聞かれました。



学生クリエーターのマサチューセッツ芸術大学での交流

国際文化交流への理解と参画の促進

国際交流基金賞

国際交流基金では1973(昭和48)年より毎年、文化活動を通じて国際相互理解・国際友好親善の促進に大きな貢献のあった個人又は団体に対し「国際交流基金賞」を授与しています。第41回を迎えた2013年度は、ハーバード大学名誉教授の入江昭氏(日本)、山海塾(日本)、泰日経済技術振興協会(タイ)を受賞者に選出し、秋に東京で授賞式を挙行了しました。また、各受賞者による記念講演会や記念対談も開催しました。

受賞者・授賞理由



【日本】
入江 昭(ハーバード大学名誉教授)

高校卒業後に渡米し、日本出身の歴史学者として長年にわたり米国で活躍。専攻はアメリカ外交史。思想・文化の影響力を重視するアプローチを特色とし、一国の外交史研究を超えた多国間の視点とその相互作用を組み込む「国際史」研究を提唱、「アメリカのディプロマチック・ヒストリーのありかたを変えた一人」と称される。日本出身者として初めてアメリカ外交史学会会長やアメリカ歴史学会会長を務めた。



© Sankai Juku

【日本】
山海塾

1975年に主宰・天児牛大(あまがつ・うしお)氏によって設立された舞踏カンパニー。主にフランスを拠点として約2年に1度のペースで新作を発表し続け、また、1980年よりアジア、欧州、南米、北米の45ヵ国延べ700都市以上で海外公演を重ねてきた。その作品は様々な文化圏で高い評価を得ており、舞踏を海外に広める上で大きな役割を果たし、世界のコンテンポラリーダンスに影響を与えている。



【タイ】
泰日経済技術振興協会

1973年、タイの元日本留学生・研修生が中心となり、タイの経済発展のため日本からの技術移転や人材育成を目的に設立した公益法人。各種事業を展開する他、タイ国内で最大の民間日本語学校を運営し、開校以来40年間で延べ20万人を超える日本語講座修了生を輩出してきた。在留邦人に対するタイ語教育でも同国内最大の機関であり、日タイ両国間における国際交流及び人材育成に大きな役割を果たしている。

国際交流基金地球市民賞

国際文化交流活動を通じて日本と海外の市民同士の結びつきや連携を深め、互いの知恵やアイデア、情報を交換し、共に考える先進的で社会的なインパクトを持つ各地の団体を顕彰します。これまで29年間の歴史の中で91団体に授賞しました。

受賞者・授賞理由



特定非営利活動法人
BankART1929

国内におけるアートセンターの先駆けとして、海外のアートセンターやアーティストと連携した国際的な文化芸術交流を展開。横浜市がめざす「文化芸術を通じたまちづくり」とも連動し、日本の中核的アートセンターとして更なる発展が期待される。



特定非営利活動法人
雪合戦インターナショナル

少子高齢化が進む町で、雪合戦をスポーツに育て上げることで地域活性化に貢献。国内外に愛好者を増やし、海外にも雪合戦連盟を立ち上げて、国際的スポーツとしての雪合戦普及活動を行っている。



特定非営利活動法人
多言語社会リソースかながわ

多様な文化背景を持つ通訳者たちが、特に高い専門性が求められる医療の分野で活躍。通訳の派遣や養成にいち早く取り組む等、今後の日本社会が抱えるであろう問題の解決策を提示している。

情報提供

多彩なメディアを活用し、 国際文化交流に関する情報を提供

国際交流基金は、国内及び海外の幅広い人々に国際文化交流の意義を理解いただき、担い手として活動に参画いただけるよう、ウェブサイト、ブログ、ツイッター等による情報発信、広報・メディアリレーションをはじめとして、様々な形態で国際文化交流に関する情報提供を行い、また交流の場を創出しています。

ウェブマガジン「をちこち Magazine」(日本語)／「Wochi Kochi Magazine」(英語)では、国際文化交流に関する様々なテーマで毎月特集を組んでいます。2013年度は、「被災地の経験と復興への歩みを世界に届ける」、「希望、夢、そして愛:闘うアーティストたち」、「コミュニケーションは日本語で」、「世界との出会いで進化する日本の伝統芸能」等の特集した他、国際交流基金事業に関わった専門家や職員による報告記事も多数掲載しました。

東京・四谷の本部ビル内に設けられた「JFIC (Japan Foundation Information Center) 通称:ジェイフィック」は、ライブラリーとイベントスペースで構成される情報発信拠点です。

JFIC ライブラリーでは、国際交流基金の実施事業に関する資料や、国際文化交流関係の図書資料、外国語で書かれた日本関係図書・映像資料等を所蔵し、広く一般に公開しています。また、種々のサービスに加え、蔵書を解説付きで紹介する展示を定期的を実施しています。2013年8月には「日本のおもちゃ」展を開催し、伝

統的なおもちゃと共に英語での解説書・関連図書を展示しました。

JFIC イベントスペースでは国内の様々な団体と連携して国際文化交流に関するイベントを開催し、幅広い層の方々に国際文化交流事業に参加いただく機会を提供しています。2013年度も多彩なパートナーと協力してシンポジウムやレクチャーを開催しました。ムスリムとして初の大相撲力士となった大砂嵐を迎えての講演会や、元ドイツ対外文化研究所事務局長のクルト＝ヨルゲン・マース博士によるソフトパワーに関する講演会は、その一例です。

JFIC ではこの他に、国際交流基金が主催した展覧会のカタログや制作した日本語教材等、出版物の販売を行っています。また、大学生や修学旅行生等、国際文化交流に関心を持つグループの訪問・見学を受入れています。

下:「外交におけるソフトパワーの可能性と限界」マース博士講演会
右:「相撲取りになる夢を叶えたエジプト人力士」大砂嵐講演会



撮影:高木あつ子

京都支部

日本文化の真髄に触れる機会を提供

京都は、長い歴史の中で生まれ、花開いた多彩な文化が息づく「文化の宝庫」です。「千年の都」が生み出した文化には、日本人の美意識と感性が凝縮されています。こうした日本文化の魅力を外国の人々に伝えるために、地域のネットワークを生かしつつ、日本文化の発信に取り組んでいます。

2013年度も地元文化機関の協力を得て、関西に滞在している日本研究フェローや招へい者等を対象に、「国際交流のタバー能と狂言の会」、「茶道体験」、「いけばな鑑賞」、「伝統音楽の鑑賞」、「錦織物の工房見学」等を実施しました。参加者たちは、「日本の伝統芸能がもつリズム感に心地よさを感じた」、「茶の湯と生け花には、心を癒す力がある」、「伝統工芸は技と心で成り立っていることを実感した」と、日本文化に触れた感想を話していました。

京都には、日本文化の神髄に触れる機会と可能性が無限に広がっています。



撮影:高橋章夫



撮影:高橋章夫

海外拠点の活動

国際交流基金は、21ヵ国に22の拠点を設け、地域・国別事業方針の下、各国・地域の状況に合わせ、文化芸術交流、日本語教育、日本研究・知的交流の各分野で様々な活動を展開しています。各拠点による活動報告をご紹介します。



イタリア ローマ日本文化会館

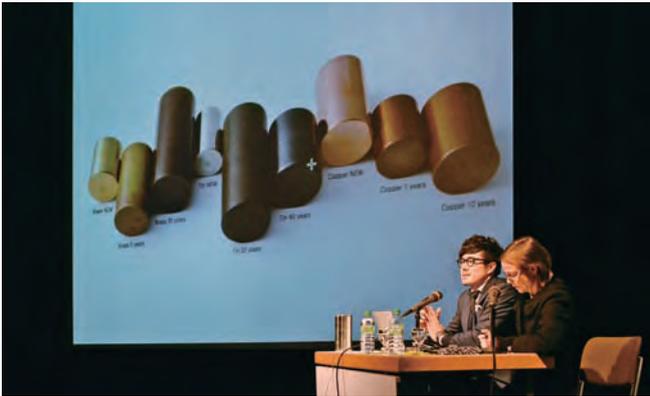
浮世絵を通じて触れる江戸文化

撮影：Mario Boccia

「背景の縞模様を見てください。これは、実は反物の新柄です。浮世絵には広告としての役割もあったのですね。」ボローニャ大学のペテルノッリ教授の説明に、参加者から驚きと感嘆の声が漏れます。ローマ日本文化会館では2013年11月から12月にかけて「浮世絵の秘宝」展と題して、ボローニャの旧個人コレクションに属する浮世絵78点を展示しました。本展の特徴は、いわゆる名品主義を採用せず、目にする機会の少ない上方絵や、日本でも現存例の少ないおもちゃ絵等、これまでイタリアで紹介される機会の少なかった作品を集めた点にあります。

オープニングに際して、本展を監修したボローニャ東洋美術研究所の研究者3人によるギャラリートークや講演会を実施。歌舞伎の女形、参勤交代やお伊勢参り、寺子屋での教育等、浮世絵を通して触れる豊かな江戸文化の世界に、多くの来場者が魅了されました。

ドイツ ケルン日本文化会館

京都の新たな「ものづくり」
～海外に飛翔する若き伝統工芸家を紹介

ケルン・京都両市の姉妹都市提携から50周年にあたる2013年は、様々な交流事業で、手ごたえのある京都特集年となりました。

まず、京都の伝統美を代表する庭園の紹介。水野克比古氏による庭園の四季を伝える写真展にはケルンと京都の両市長も訪れました。作庭家・小川勝章氏による講演会も多くの聴衆をひきつけました。続いて、ゲーテ・インスティトゥートのヴィラ鴨川に滞在して制作活動を行ったケルンのアーティストによる京都写真展、映画では大島渚監督の回顧特集を実施しました。更に学術交流でも、ケルンと京都の大学関係者を中心に刑事・民事訴訟法の日独比較シンポジウムを開催しました。

締めくくりは、京都の伝統産業から生まれた新しいデザインの紹介。木工芸、金網や茶筒の若手職人による講演とワークショップで、日本のものづくりの高い技術と日用品に対する美意識をドイツの人々に改めて感じてもらうことができました。

フランス パリ日本文化会館

金沢の武家文化を通して、
伝統文化の継承と発展を伝える

撮影：Clement-Olivier Meylan

金沢市との共催で、金沢の地で江戸時代より引き継がれた武家文化を紹介する「加賀百万石～金沢に花開いたもう一つの武家文化」展を開催しました。金沢から漆芸、金工、染織、能面、能装束、茶道具、甲冑などの名品を運び込み、金沢の文化の発展を総合的に紹介しました。

金沢には、17世紀に加賀藩が設立した工芸工房・御細工所を中心に、蒔絵、象嵌等の高い工芸技術が継承されています。武家社会に能楽、華道、茶道等が広く浸透した一方で、豊かな工芸作品群が生み出されました。こうした伝統の継承を辿るべく、展覧会にあわせて、加賀宝生による能楽公演や、遠州流茶道のデモンストレーション、講演会、能楽講座、加賀象嵌デモンストレーションなどの関連事業を実施しました。

現在も市民の活発な活動によって支えられる金沢の豊かな文化の足跡は、文化国家日本における伝統の継承と発展を考えるうえでも、示唆に富んだものと言えるでしょう。

英国 ロンドン日本文化センター

日本女性のパワーと創造力を伝える
トークシリーズ

「日本の女性」に着目し、様々な分野の第一線で活躍する元気な女性作家らの声を英国の人々に届けました。

テート・モダンに作品が収蔵される写真家・石内都氏は、バイタリティーと自由な発想で多くの聴衆に勇気と活力を与えました。失われつつあるアイヌ文化をカメラに収めてきた宇井真紀子氏は、「アイヌの心」を英国人に伝達。そして、時代や女性の社会的地位によって変遷してきた日本の化粧モードにまつわるポーラ文化研究所・津田紀代氏のトークは、身近で新鮮なテーマで聴衆の高い関心を集めました。更に、ヴェネチア・ビエンナーレ2015日本館の作家に選ばれた塩田千春氏の作品制作の背景にある自身の思想、或いは、商業的な評価にとられない横浜聡子監督の映画作りへの姿勢など、それぞれの活動分野でひとりひとりの作家自身が「作品」となることで、日本女性のおふれるエネルギーと豊かな創造力を広く紹介し、来場者の共感を得ることができました。



スペイン マドリッド日本文化センター

南蛮漆器で日西交流の歴史を再認識 ～日本スペイン交流400周年



日本スペイン交流 400 周年のオープニング・イベントの 1 つとして、「南蛮漆器：スペインに残された『日本』－慶長遣欧使節 400 周年－」展をスペイン教育文化スポーツ省及び国立装飾美術博物館と共催しました。在スペイン日本国大使館の後援と複数の日系企業の支援を受けたこの展覧会は、これまで知られていなかった南蛮漆器作品の美しさや、日西間の交流の軌跡の深さを、観客に強く印象づけました。一方、国内外の東洋美術史専門家からは、監修・展示内容の素晴らしさ、図録の学際的価値に関する賞賛の声が多数寄せられました。オープニング式典に皇太子殿下のご臨席を得たこともあり、本邦と当地のメディアで広く報道されました。4ヵ月にわたり多数の来観者で会場を賑わせた展覧会は、大盛況のうちに幕を閉じました。

学際的意義に加え、社会的反響も大きかった本プロジェクトは、日本文化普及という観点からも日西交流史の新たな1ページを刻む有意義な事業となりました。



ハンガリー ブダペスト日本文化センター

中東欧地域の日本研究者が一堂に会した シンポジウム



ヴィシegrad 4 国（チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロバキア）と日本の交流年である 2014 年の 2 月、ブダペストのエトヴェシ・ロラード大学と共催で、日本研究シンポジウムを開催しました。中東欧の若手日本研究者を支援し、ネットワークを強化することを目的とするものです。

初日は、英国オックスフォード・ブルックス大学人類学部教授ジョイ・ヘンドリー氏による基調講演、若手研究者による個別発表、シニア研究者との質疑応答を交えた公開シンポジウムを実施。文学、社会学、言語学と多岐にわたる研究発表には、「女流落語家」等個性的な発表もあり、研究者のみならず一般参加の大学生や市民にとっても、日本への関心を深める貴重な機会となりました。2 日目は、日本研究機関関係者が、中東欧地域が直面する課題、国境を越えた対応策等について幅広く議論しました。中東欧における日本研究の更なる発展を期待させる 2 日間となりました。



ロシア モスクワ日本文化センター

日露のアーティストを繋ぐ 総合イベント



モスクワでは、近郊都市での事業実施と現地機関との協力、また、ロシア在住の日本人アーティストやロシア人日本文化愛好者との連携に力を入れています。日露合同美術展「十力の金剛石」は、その両者が組み合わせられた好例です。

宮沢賢治による短編小説「十力の金剛石」のロシア語訳絵本にロシア伝統工芸画家が挿絵をつけたことをきっかけに、その工芸の中心地であるムィティシ地区の公立美術館で、同書の展覧会が行われることとなりました。これを日本文化を広く紹介する一大イベントにしたいと考えた美術館の要請を受けて、墨絵画家の小林東雲氏を日本から招へい。小林氏は、「十力の金剛石」のロシア語朗読に合わせて、白い壁面に墨で宮沢賢治の世界を描き出して、訪れた観客を魅了しました。

会場では、日本とロシアのアーティストによる尺八、生け花、茶道、書道、墨絵、折り紙等の実演やワークショップも行われ、好評を博しました。



エジプト カイロ日本文化センター

アニメファンのエジプト人若者層が 大型イベントを企画・開催



2013年7月の政変以降、情勢不安が続く中、現地パートナーと協力し、様々な工夫を凝らしながら各事業を実施しました。

中でも、「第1回エジプトアニメ・マンガコンベンション (EGY-Con)」は、前年春に開催された「ジャパン・ポップカルチャー・フェスティバル」(カイロ日本文化センター主催)に触発された現地アニメ・マンガ愛好家有志によって企画されました。カイロ日本文化センターは企画からサポートに入り、エジプト人バンドによるアニメソング演奏や歌唱コンテスト、コスプレ、同人誌・イラスト展示、似顔絵コーナー、折り紙、習字等のコンテンツを用意。当日は1,500人以上の若者達が会場を熱気で埋め尽くし、日本文化を体験できる参加型イベントを楽しみました。

これまで個人的に日本のアニメ・マンガを楽しんでいたエジプト人若者層が、仲間を巻き込みながら自発的に企画・実施した初の大型イベントとして、記念すべき事業となりました。



韓国 ソウル日本文化センター

日本映画黄金期の二大女優を トークイベントに招へい



日本映画の黄金期に数々の映画に出演し、今も現役で活躍を続ける2人の女優を韓国に招きました。

韓国映像資料院で開催された「スタジオ大映特集—増村保造&市川崑」特集に合わせて、若尾文子氏がソウル入り。大映映画の絶頂期を支えた増村保造監督の数々の作品に主演した若尾氏のファンは韓国にも多く、トークイベントはどの回も満員となりました。登場時には「イエッポヨ (おきれいです)！」の掛け声もかかる等、大きな盛り上がりを見せました。

クァンジュ (光州) 市で開催した「黒澤明特別展」には、香川京子氏がゲストとして登壇。「赤ひげ」や「天国と地獄」出演時の思い出から、黒澤監督の人柄、さらにご自身の現在の活動まで、多岐に渡るエピソードを披露しました。サイン会では香川氏の人柄に魅せられた光州の映画ファンが長蛇の列を作り、再度の来韓を望む声が多く寄せられました。



中国 北京日本文化センター

日中韓共同制作の演劇プロジェクトを通して 3カ国の交流の礎を築く



2年をかけて日中韓3カ国で共同制作した演劇プロジェクト「祝/言」は、過去に例のない新しいタイプの総合芸術作品です (p.19 参照)。日中関係悪化の余波が残る中、中国の人々にどのように受け止められるか、関係者の胸に潜んでいた不安は、上海と北京の公演で一掃されました。「中日韓の魂が潜んだ1作」、「とても美しい吊い」、「魂」まで響く演劇等、様々な賛辞が寄せられました。また、多くの観客が、終幕後に公演メンバーを待ち受けて、熱心に話し合っていました。

この公演をきっかけに、青森県立美術館、上海話劇芸術中心、蓬蒿劇場、そして国際交流基金の間に、将来にわたる交流の礎ができました。特に、北京の共催者であった蓬蒿劇場は、同作品の「テーマの普遍性と高い芸術的価値」を高く評価。同劇場が毎年春に開催する民間主導の国際演劇祭「南鑼鼓巷演劇フェスティバル」のオープニング作品として招かれ、2014年5月の再演が決定しました。

**防災教育コンペで
地域の防災に取り組む若者を奨励**



2014年3月11日、ジャカルタ日本文化センターでは、東日本大震災の犠牲者への黙とうに続き、「防災教育若者コンペティション 優秀学生表彰式」が行われました。

前年の2倍を上回る1,276人の応募から、書類選考を突破した26チーム104人が、それぞれの地元における防災のアイデアを5分間の短編ビデオに作りこみました。国際交流基金の公式フェイスブックでも紹介されたこれら短編ビデオによる最終選考を突破した24人が、応募倍率53.1倍を勝ち抜いて、最終優秀学生として表彰されたのです。

24人の学生は、表彰式の直後に興奮も冷めやらぬま日本へ飛び、外務省が実施するJENESYS2.0プログラム（青少年交流）に参加しました。10日間にわたる被災者との交流やホームステイを通じて日本の被災の経験から学んだことを活かして、彼らは帰国後も、知恵を絞り、汗をかいて、防災教育の活動を続けています。

**現代日本文化を通して、
日本のコンテンツ産業を支援**



芥川賞作家・阿部和重氏の話題作「IP/NN」のタイ語版が、国際交流基金の助成を受けて2014年3月にタイで出版されました。この出版を記念して阿部氏をタイに招き、第12回バンコク国際ブックフェア2014の公式イベントの1つとして、タイの現代作家とともにトークセッションと朗読会を開催しました。

対談の相手は、2009年東南アジア文学賞を受賞し、現在タイで最も旬な作家と呼ばれるウティット・ヘーマムーン氏。2人は互いの作品を朗読した後、両国の文学を取り巻く状況や、現代社会について語り合いました。このイベントは、日本文学の新しい側面をタイに紹介するだけでなく、日本とタイの作家交流を促進し、さらに文学に関連する日本のコンテンツ産業を側面から支援する貴重な機会となりました。タイの出版社も、阿部氏の動向と写真をフェイスブック上で密に更新。クールな阿部氏をアピールして、イベントを盛り上げてくれました。

**日本の優れた防災の取り組みを紹介して、
防災教育の普及に貢献**



多くの自然災害に見舞われたフィリピンでは、人々の間で防災に向けた取り組みへの関心が高まっています。この機を捉えて日本の優れた防災の取り組みを紹介し、実際に体験してもらうことで、フィリピンの人々に防災の意識を更に高めてもらうと、様々な取り組みを実施しました。

公立高校で日本語を教える教師18人は、教師研修の一環としてやさしい日本語・英語・フィリピン語による簡易防災マニュアルを作成しました。マニュアルは、2013年に台風30号が直撃したフィリピン中部の地方語にも翻訳される予定です。また、NPO プラスアーツの協力を得て、教員等を対象に防災教育の指導者研修を行い、近隣の高校生・小学生を招いた防災啓発事業「イザ!カエルキャラバン」を実施しました。

今後も、日本の強みでもある防災の知恵を継続的に発信し、フィリピンにおける防災教育の普及を支援していく計画です。



マレーシア クアラルンプール日本文化センター

東南アジア初の本格的な 文楽公演とワークショップ



日・ASEAN 友好協力 40 周年、クアラルンプール日本人会設立 50 周年、マレーシア日本人商工会議所設立 30 周年と、交流の大きな節目となる 2013 年、日本の人々を温かく受け入れてくれたマレーシアの人々への恩返しとして、東南アジアで先例のない本格的な文楽公演を行うこととなりました。実行委員会が結成され、民間劇場との共催、多くの企業・団体の協力のもと、実現する運びとなったものです。

桐竹勘十郎氏をはじめ文楽界を代表する実力者が揃って出演した 3 回の公演と日本人学校でのワークショップは、いずれも満席となりました。数百年にわたり育まれた日本の伝統芸能を一目見ようと、キャンセル待ちの観客が劇場前に長い列を作りました。初日の公演にはペラ州皇太子夫妻、ASEAN 各国の大使、文化関係者らも臨席。演者が国立テレビ局の生放送番組に出演したり、イベント雑誌で表紙を飾ったりと、大いにメディアを賑わせました。



ベトナム ベトナム日本文化交流センター

日越外交樹立40周年を 「草間彌生:オブセッションズ」展等で祝う



日・ASEAN 友好協力と日越外交関係樹立からともに 40 周年を迎え、ベトナム日本文化交流センターは独立家屋という施設の特性を生かした、祝祭感にあふれる展覧会を実施しました。

「草間彌生:オブセッションズ」展では、展示ホールだけでなく、中庭、ガレージ、倉庫を含め敷地全体を展示会場として活用し、ハノイ市の中心部に“草間ワールド”を作り出しました。展覧会は話題を呼び、2 ヵ月の会期中に約 2 万人が赤と白の水玉模様の世界に飛び込み、思い思いに作品を楽しみました。

また、アートユニット「HITOTZUKI」による展覧会「ABILIGHT」展でも、室内展示に加えて事務所建物や外壁にもペインティングを展開、事務所への来館者のみならず、道行く人々の関心も惹きつけました。

敷地と建物の全体を活用して、ベトナムの人々の暮らしの中に、日本のアートでアクセントを与えています。



インド ニューデリー日本文化センター

日本とインドの交流を深める 地道な「苗植え」



広い国土を持ち多種多様な文化を抱える上に、交通インフラが未整備のインドでは、大都市にとどまらず多数の地域で、それぞれの状況やニーズに合った文化イベントを実施する「種まき」の仕事を大切にしてきましたが、ニューデリー日本文化センター開設から 20 年を迎え、近年は、狙いを定めて交流を根付かせる「苗植え」にも力を入れ始めています。

例えば、「アニメ声優ワークショップ」では、アニメファンの層に日本語学習者を増やすことを狙って、日本から招へいたアニメ声優の指導のもと、参加者にアフレコを体験してもらいました。また、「防災教育ワークショップ」では、インドでは実施されることの少ない学校での避難訓練を行い、教師と児童・学生の防災意識向上の契機となりました。更に、日本語分野では、インド初となる「日本語教師オンライン研修」を通じて、直接的な研修が行いにくい地方在住の日本語教師に教授法研修を届けました。



オーストラリア シドニー日本文化センター

世界最大規模の日本映画祭を 10都市で開催



第17回を迎えた日本映画祭は、ブランドを再構築し、新しいロゴとスローガン「Watch Japan Unfold」のもと、オーストラリアの5大都市（シドニー、メルボルン、ブリスベン、パース、キャンベラ）で各20～40作品を有料上映しました。一方、日本関連イベントが少ない地方都市（ブルーム、ケアンズ、タウンズビル、ダーウィン、ホバート）では、手軽に日本に触れる機会として無料で3作品を上映し、5大都市と合わせて合計25,000人の観客を動員しました。

日本からゲストとして、『くじけないで』の主演女優・八千草薫氏及び深川栄洋監督、『俺俺』の三木聡監督、『図書館戦争』の佐藤信介監督、及び脚本家・野木亜紀子氏を招けました。特に、八千草薫氏は58年ぶりの海外映画祭出席とあり、日本国内メディアを含め大きな関心を引きました。

20社のスポンサー協力の下、官民一体となった同イベントは、世界最大規模の日本映画祭となりました。



カナダ トロント日本文化センター

北米最大のトロント作家祭等 カナダに集う日本の作家たち



2013年秋、北米最大の国際作家祭に、ともに芥川賞作家の阿部重和氏と川上未映子氏が参加。川上氏は文学・翻訳パネルにカナダ、欧州の作家と、また両氏が日本文学パネルに研究者と共に登壇して、日本文学界における3.11の受け止め方等を語った他、大学等でも学生や一般市民のための朗読やパネル討論に臨みました。

作家の小野正嗣と早助よう子、翻訳家の柴田元幸、現代文化研究者ローランド・ケルツの各氏もトロントを訪れ、トロント日本文化センター等で自作朗読やパネル討論を実施。小野氏はモンリオール大学でも現代日本文学について講演しました。

2010年の日加PEN交流事業、2011年の英文日本文学誌『モンキービジネス』発刊、2012年の国際作家祭などを機に、阿刀田高、浅田次郎、小澤實、川上弘美、古川日出男、伊藤比呂美の各氏らがカナダを訪問。近年、日本とカナダの文学交流が勢いを増しています。



米国 ニューヨーク日本文化センター

日米両国の音楽家による ジャズの交流公演



撮影：GION

「A New Generation of Jazz from Japan～黒田卓也とアンサンブル～」と題して、日本のジャズ紹介事業を実施しました。日本人として初めてUSブルーノートからデビューし、最新アルバム「Rising Son」がビルボードで上位にランクインしたトランペット奏者と日米両国の音楽家たちによる交流公演は、前売券がほぼ完売となり、公演当日は開演1時間以上前から数少ない当日券を求める長い列ができました。観客は、演奏技術の高さと鋭い音楽性に魅了され、舞台に引き込まれていました。終演と同時に熱狂的な拍手が始まり、暫くの間、鳴り止まない客席に、黒田氏と共演者たちも大きな手ごたえを感じた様子でした。

公演は、東日本大震災3周年の直前に当たりました。阪神・淡路大震災での黒田氏自身の被災経験を交えたトークと、東日本大震災の被災者に思いを寄せたオリジナル曲の演奏にも、観客は熱心に聞き入っていました。



米国 ロサンゼルス日本文化センター

日本のジャズグループの米国初公演とワークショップ



22歳の新進気鋭のピアニスト桑原あい氏率いるジャズグループ「ai kuwabara trio project」の3人が、2013年11月、サンフランシスコを皮切りに4都市で、米国初公演を行ないました。ジャズ発祥の地アメリカで、自分たちの音楽がどう受け入れられるか緊張したという3人でしたが、いずれの会場も満員御礼。音楽に合わせて一緒にエアピアノを弾く人、指を鳴らして演奏に加わる人等、思い思いに楽しむ観客の姿が見られ、最後はスタンディング・オベーションと暖かい拍手で見送られました。

公演の他、地元の大学でのワークショップや、音楽専攻学生とのセッションも行いました。ラジオ局や新聞社とのインタビューに臨んだ桑原氏は、「自分の音楽を特定のジャンルに当てはめる意識はない。自分の音楽を表現するためにジャズの手法を使っている感覚だ」と語っていました。既存の境界を越えた日本の若い感性が、1,300人を越える米国の聴衆を魅了しました。



メキシコ メキシコ日本文化センター

音楽を通じた震災復興祈念 ～日墨交流400周年記念行事として



支倉常長遣欧使節団のアカプルコ到着400周年を記念する行事の一環として、一行が出帆した仙台藩の港にちなんで「月の浦」と命名した特別編成の邦楽グループが、一行の出身地東北各県の音楽をメキシコ各地で紹介しました。

支倉使節団は「慶長の大津波」の復興事業でもあったと言われますが、今回の事業は音楽を通じた東日本大震災復興祈念の意味も持ち合わせました。奇しくもアカプルコは大型台風による甚大な被害を受けたばかりでしたが、被災地の子供たちを公演に招待し元気づけることもできました。

その後、グループ「月の浦」は、支倉一行がスペインに渡るため陸路メキシコを横断した道筋を辿り、5都市で6公演と3ワークショップを敢行。合計4,800人のメキシコ人聴衆に和太鼓、津軽三味線、尺八そして民謡を楽しんでもらうことができました。ワークショップでの子供たちの輝く瞳が印象的でした。



ブラジル サンパウロ日本文化センター

新しい日本文化紹介ジャンル 「ゲーム音楽」をいち早く紹介



アニメやゲームは、ブラジルでも日本のポップカルチャー人気の中心の1つです。アニメソングがポップカルチャーの有効ジャンルとしてすでに若者の間で定着している一方、ゲーム音楽はちょうど注目が集まり始めた段階です。そこで、ゲーム音楽にスポットを当て、日本からピアニスト中山博之氏を招いて、人気ゲーム挿入曲のアレンジ等によるピアノソロコンサートを実施しました。

ゲーム音楽のピアノコンサートは、まだ海外でほとんど例のない、新しい日本文化紹介ジャンルです。コンサートは大きな前評判を呼び、1,000人以上の人が当日整理券を求めて行列を作りました。聴衆の熱気あふれる反響に、中山氏も大きな手ごたえを感じていました。

初事業の成功に力を得て、今後は当地アーティストとの共演やゲーム映像とのコラボレーション等に発展させ、日本のポップカルチャー・ファンの大きな期待に応えていきます。

事業実績 文化芸術交流

1. 多様な日本の文化・芸術の海外への紹介

(P.15-17 参照)

(1) 外交上重要な機会、地域・国への重点的な対応

①米国

日米学芸員交流事業 建築を専門とする北米の学芸員のグループ招へい
宮城—ニューオリンズ青少年ジャズ交流

桑原あいトリオ巡回公演

巡回展「東北—風土・人・暮らし」、「未来への回路—日本の新世代アーティスト」

その他、巡回展に合わせた専門家派遣によるレクチャー・デモンストレーション、ポップカルチャー講演等

②中国

日中共同制作演劇「能と昆劇による The Spirits Play 靈戯『記憶、場所、対話』」

日中韓共同制作演劇「祝／言」

巡回展「キャラクター大国、ニッポン」

その他、巡回展に合わせた専門家派遣によるレクチャー・デモンストレーション等

③韓国

日中韓共同制作演劇「祝／言」

巡回型小規模狂言公演、レクチャー・デモンストレーション

「リ・クエスト」展

巡回展「ウィンターガーデン」

その他、日韓パッケージデザイン交流等

④ ASEAN

日・ASEAN 友好協力 40 周年記念:「Media/Art Kitchen」展
(インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ)

舞踊プロジェクト「MAU: J-ASEAN Dance Collaboration」

(インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール)

音楽プロジェクト「Drums & Voices」(ベトナム、カンボジア、ミャンマー、タイ、ラオス、ブルネイ)

「ミャンマー文化・スポーツ交流ミッション」フォローアップ: 伝統音楽招へい、柔道選手団招へい

小規模音楽公演「Ryuz (リュズ)」(タイ)

文化協力: ベトナム青年劇場等支援、アジアオーケストラ支援、アジア美術関係者支援

巡回展「写楽再見」、「キャラクター大国、ニッポン」、「パラレルニッポン」、「ウィンターガーデン」

その他、巡回展に合わせた専門家派遣によるレクチャー・デモンストレーション等

⑤スペイン

日スペイン交流 400 周年記念「杉本文楽 曾根崎心中」欧州公演

「南蛮漆器: スペインに残された『日本』—慶長遣欧使節 400 周年—」展等

⑥アフリカ

TICAD V 開催記念: 邦楽公演、現代美術展「小沢剛・高木正勝 アフリカを行く」、アフリカ映画上映会

邦楽小規模公演「和魂楽匠」(モロッコ、セネガル、ガボン)

和太鼓小規模公演(マラウイ、ケニア)

折紙ワークショップ(ベナン、コンゴ民主共和国)等

(2) 広く全世界に向けた継続的な事業展開

①国際交流基金海外巡回展

デザイン、建築、写真、工芸、武道、ポップカルチャー等、様々なテーマの下に制作した巡回展を計 70 ヶ国 1 地域 119 都市において 120 件開催。

②日本映画上映

国際交流基金フィルムライブラリーを活用した日本映画祭・日本映画上映会を 70 ヶ国 1 地域で 102 件実施。18 ヶ国における 23 件の日本映画上映会に対し経費を支援。更に、日・ASEAN 友好協力 40 周年対応事業として ASEAN9 ヶ国 18 都市の海外拠点と在外公館に向け、日本の劇映画やアニメの DVD 計 2 作品 35 枚を配布して日本映画上映の機会を提供。

③テレビ番組紹介

ドラマやドキュメンタリー等、日本のテレビ番組を 10 ヶ国で放映。

④翻訳出版助成

27 ヶ国で 41 件の日本の図書の翻訳・出版を支援。

⑤国際図書展参加

世界各地で 16 件の国際図書展に参加。ブース出展に合わせて、講演会や映画上映会、伝統芸能公演、折り紙教室、漫画教室等の日本文化紹介事業や日本語講座等の日本語普及事業等を実施。

⑥国際美術展・建築展参加

第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「abstract speaking - sharing uncertainty and collective acts (抽象的に話すこと - 不確かなものの共有とコレクティブ・アクト)」(代表作家/田中功起氏、キュレーター/蔵屋美香氏)を実施し、特別表彰を受賞。

(3) 日本文化紹介・文化交流の基盤づくり

①専門家交流

アジア(中国、韓国、インド)をはじめとする諸外国の学芸員の招へい

「国際舞台芸術ミーティング in 横浜 (TPAM in Yokohama)」の開催とそれに合わせたアジア・欧米からのプレゼンター等、舞台芸術関係者計 20 人の招へい

「あいちリエンナーレ 2013」の実施時期に合わせた、世界各国の美術関係記者招へい

その他、国内外の学芸員による国際シンポジウムの開催等

②情報発信

Performing Arts Network Japan: 現代日本の舞台芸術関連情報を紹介する日英 2 言語ウェブサイト 年間アクセス数 445,054 件、メルマガ登録者数 1,211 人

「日本映画データベース (JFDB)」：年間アクセス数 1,278,343 件、昨年度比 739,071 件の増加を記録

『Japanese Book News』：日本の新刊書や最新出版情報を紹介する季刊英文ニュースレター 計 4 号 (各 5,000 部、計 20,000 部) 発行

「日本文学翻訳書誌データベース」：年間アクセス数合計 4,602 件
翻訳推薦著作リスト『Worth Sharing』：第 2 号発行

2. 文化・芸術を通じた世界への貢献 (P.18-19 参照)

(1) 双方向型、共同作業型の交流事業

① 国際共同制作事業

日中共同制作演劇「能と昆劇による The Spirits Play 霊戯『記憶、場所、対話』」

日中韓共同制作演劇「祝／言」

「Media/Art Kitchen」展

舞踊プロジェクト「MAU: J-ASEAN Dance Collaboration」

音楽プロジェクト「Drums & Voices」

「ミャンマー文化・スポーツ交流ミッション」フォローアップ：伝統音楽招へい、柔道選手団招へい

② 双方向型の人的交流／専門家間のネットワークづくり

「国際舞台芸術ミーティング in 横浜 (TPAM in Yokohama)」の開催とそれに合わせたアジア・欧米からのプレゼンター等、舞台芸術関係者計 20 人の招へい

外務省主催「第 7 回国際漫画賞」受賞者の招へい (スペイン、タイ、米国)

(2) 世界共通の課題への取組み

① 文化遺産保護・継承等に取り組む事業

文化遺産保存修復実習講習 (ウズベキスタン)

染織文化財保存修復ワークショップ (アルメニア)

カマン・カレホユック博物館学フィールドコース (トルコ) 等

② ASEAN 諸国向け文化協力事業

ベトナム青年劇場等支援

アジアオーケストラ支援

アジア美術関係者支援

③ 東日本大震災復興に向けた事業

第 55 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館展示「abstract speaking - sharing uncertainty and collective acts (抽象的に話すこと - 不確かなものの共有とコレクティブ・アクト)」

日中韓共同制作演劇「祝／言」

宮城－ニューオリンズ青少年ジャズ交流

巡回展「3.11 - 東日本大震災の直後、建築家はどうか対応したか」、
「東北－風土・人・暮らし」、「美しい東北の手仕事」及び展覧会に合わせた東北にゆかりの深い建築家、伝統工芸職人の派遣

その他、東北を舞台とした、あるいは復興・再生をテーマとした劇映画やドキュメンタリー DVD の上映会等

〔文化芸術交流事業プログラム〕

(本文中に件数が明示されているプログラムを除く)

文化芸術交流海外派遣……………	57 件 (56 カ国 1 地域 97 都市)
国際展参加……………	1 件 (1 カ国 1 都市)
企画展……………	6 件 (3 カ国 1 地域 5 都市)
専門家等交流……………	13 件 (5 カ国 2 地域 12 都市)
文化芸術交流海外派遣助成……………	116 件 (63 カ国 1 地域 233 都市)
海外展助成……………	60 件 (28 カ国 58 都市)
パフォーミングアーツ・ジャパン (北米) ……	7 件 (1 カ国 13 都市)
パフォーミングアーツ・ジャパン (欧州) ……	14 件 (13 カ国 39 都市)
共同制作……………	6 件 (12 カ国 19 都市)
文化協力……………	9 件 (12 カ国 30 都市)
文化協力助成……………	5 件 (4 カ国 7 都市)

3. 中国との青少年交流 (P.20 参照)

(1) 中国高校生長期招へい事業

第 7 期生 32 人が研修を終えて帰国、第 8 期生 30 人が新たに来日。

(2) 「ふれあいの場」設置・運営事業

中国国内 12 都市に設置された、ふれあいの場を運営。2013 年度延べ来場者数 (含雑誌・書籍等閲覧者) は 34,482 人。

(3) 日中交流担い手ネットワーク整備事業

派遣事業 8 件、招へい事業 1 件を実施、事業情報の発信、関係者間の情報共有と連携強化のために、オリジナルウェブサイト「心连心ウェブサイト」を運営。

事業実績 海外における日本語教育

1. 「JF 日本語教育スタンダード」の活用推進 (P.23 参照)

(1) 「JF 日本語教育スタンダード」改訂

『JF日本語教育スタンダード2010』及びその『利用者ガイドブック』第2版の内容を一部改訂し、第2版第2刷として対外発表。初版とあわせて各約6,800部を配布。

(2) 「JF 日本語教育スタンダード」関係セミナー等

国内外のセミナー、学会、研究会を通じた紹介・活用推進事業計74件を実施。

(3) 「JF 日本語教育スタンダード」普及活動助成

「JF日本語教育スタンダード」の普及に資する活動を支援するため、海外の日本語教育学会・教師会等が行う事業8件を助成。

(4) 『まるごと日本のことばと文化』

「JF日本語教育スタンダード」準拠コースブック『まるごと日本のことばと文化』入門(A1)「かつどう」「りかい」を市販化。

2. JF 日本語講座 (P.24 参照)

独立行政法人国際協力機構(JICA)が支援するキルギス共和国日本人材開発センターにおいて、JF日本語講座を開講。

JF海外拠点を含め、27ヵ国30ヵ所でJF日本語講座を実施。

3. 海外の日本語教育の現状に関する調査 (P.24 参照)

3年毎に実施する海外における日本語教育機関・教師・学習者等に関する一斉調査。2013年7月に2012年度調査結果の速報値を公開、12月には集計及び分析結果をまとめた『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』(本冊)及びその「概要」(日本語版・英語版)を発行した。更に、「結果概要抜粋」を作成・配布し、ウェブサイトでも公開した。

4. インターネットを活用した教育ツール (P.25 参照)

(1) WEB版「エリンが挑戦! にほんごできます。」

年間アクセス数約753万件(2010年度からの累計アクセス数約2,113万件)

(2) 「みんなの教材サイト」

年間アクセス数約296万件(2002年度からの累計アクセス数約7,067万件)

(3) 「まるごと+(まるごとプラス) 入門 A1」

年間アクセス数約51万件

スペイン語版および姉妹サイト「まるごとのことば」を公開

(4) 「日本語でケアナビ」

年間アクセス数約67万件(2007年度からの累計アクセス数約460万件)

(5) 「アニメ・マンガの日本語」

年間アクセス数約313万件(2009年度からの累計アクセス数約1,097万件)

(6) 「NIHONGOe (にほんごいい) な」

年間アクセス数約101万件(2010年度からの累計アクセス数約391万件)

iOS版、アンドロイド版を公開

5. 日本語能力試験 (JLPT) (P.26 参照)

(1) 第1回試験 (7月7日)

海外21ヵ国・地域、101都市で実施し、198,962人が受験。

(2) 第2回試験 (12月1日)

海外63ヵ国・地域、202都市で実施し、242,282人が受験。

年間合計の海外受験者数は441,244人。

新たな試験実施都市は、第1回試験ではマナド(インドネシア)及びタシケント(ウズベキスタン)の2都市、第2回試験ではアルジェ(アルジェリア)、アンタナナリボ(マダガスカル)及びシェムリアップ(カンボジア)の3都市。

6. 日本語専門家の海外派遣 (P.27 参照)

(1) 日本語専門家: 40ヵ国 124ポスト

日本語上級専門家: 27ヵ国 39ポスト

日本語専門家: 30ヵ国 63ポスト

日本語指導助手: 15ヵ国 22ポスト

(2) インターン派遣

日本語教師養成課程を有する国内の大学との連携により、43大学346人の学部生・大学院生に、25ヵ国1地域の延べ117機関における日本語教育実習(インターン)の機会を提供

(3) 米国若手日本語教員 (J-LEAP) 派遣

日米間の文化・人材交流と米国における日本語教育支援を目的とする事業。新規に11人を派遣。継続派遣者と合わせ計21人が、各地の初中等教育機関でティーチング・アシスタントを務め、現地コミュニティでの日本文化・社会理解促進活動に協力。

7. 日本語教育支援プロジェクト (P.27 参照)

海外拠点及び各地の中核的な日本語教育機関とのネットワーク「JFにほんごネットワーク（通称：さくらネットワーク）」のメンバーは、45ヵ国2地域の126機関（2013年度末）。21ヵ所の基金海外拠点で実施する事業スキーム156件、4ヵ国4ヵ所の日本センターで実施する事業スキーム13件を運用。更に、27ヵ国・地域の中核メンバーに対する助成事業として65件を支援。

この他に、海外拠点からの支援が届きにくい国・地域において、日本語教育機関・団体が実施する活動60ヵ国161件を支援。

8. 経済連携協定（EPA）に基づく看護師・介護福祉士候補者の日本語教育 (P.27 参照)

国内研修で最大限の効果をあげるための準備段階として、来日前の現地日本語研修を2013年11月から2014年5月まで実施。インドネシアでは看護師48人、介護福祉士107人が、フィリピンでは看護師65人、介護福祉士83人が、それぞれ6ヵ月の研修を受講。

9. 海外の教師を対象とした研修 (P.28 参照)

(1) 政策研究大学院大学との連携による大学院教育

日本語教育指導者養成プログラム（修士課程）：4ヵ国4人（新規）、4ヵ国4人（継続）

日本語文化プログラム（博士課程）：2ヵ国2人（継続）

(2) 海外日本語教師上級研修

教材開発等の課題を有する日本語教師を対象にしたプログラムに9ヵ国10人が参加。

(3) 海外日本語教師訪日研修

長期：33ヵ国60人

短期：34ヵ国125人

JF講座講師：23ヵ国36人

韓国：54人

中国：大学19人、中東20人

タイ：62人

フィリピン：17人

日系人：4ヵ国9人

日本ハンガリー協力フォーラム特別事業：6人

(4) 地域連携研修

にほんご人フォーラム：日本を含む6ヵ国35人

10. 海外の学習者を対象とした研修 (P.28 参照)

(1) 専門日本語研修（外交官・公務員）

35ヵ国・地域39人／8ヵ月間

日本語学習に加え、官庁、公的機関、大学等教育機関、民間企業等の訪問、関係者との意見交換、更に、大阪大学大学院国際公共政策研究科との連携講座を実施。

(2) 専門日本語研修（文化・学術専門家）

29ヵ国・地域65人／2または6ヵ月間

情報の収集・発信、関係者との交流など文化・学術専門家としての活動に必要な日本語能力を身につけるための研修、大学院等教育研究機関や国公立の図書館、博物館等の訪問、専門家、関係者との意見交換を実施。

(3) 日本語学習者訪日研修等

成績優秀者：66ヵ国66人

JF講座優秀者：24ヵ国26人

大学生：28ヵ国119人

国内大学連携大学生：25ヵ国・地域127人

高校生：11ヵ国41人

李秀賢氏記念韓国青少年：30人

米国JET記念高校生：32人

(4) 地域連携研修

大阪府JET来日時研修：3ヵ国12人

全国JET日本語教授法研修：11ヵ国28人

かめのり地球青少年サミット及びプレ日本語講座：2ヵ国12人

11. 受託研修 (P.28 参照)

博報児童教育振興会（博報財団）海外教師日本研修プログラム：13ヵ国13人

青年日本語教師派遣前研修：1ヵ国21人

ロシア初中等教育日本語教師研修：7人

大阪ガス国際交流財団インドネシア大学生訪日研修：2人

フィリピン日系人会国際学校プログラム：12人

キャンボンベトナム日本語学習者訪日研修：1人

ニュージーランド日本語教師研修：7人

ナポリ東洋大学訪日研修：23人

カタール青少年訪日研修：18人

12. 各センターの図書館

日本語国際センター 来館者数：17,242人

関西国際センター 来館者数：18,698人

事業実績 日本研究・知的交流

1. 日本研究機関への支援 (P.31 参照)

(1) 日本研究機関支援

74 機関 (26 カ国・地域)

① 東アジア

韓国：翰林大学日本学研究所、高麗大学日本研究センター、国民大学日本研究所、ソウル大学日本研究所

中国：四川外国語大学、西北大学、浙江工商大学、東北師範大学、東北大学、南開大学、復旦大学、遼寧大学

台湾：国立政治大学

② 東南アジア

インドネシア：インドネシア大学大学院

タイ：タマサート大学教養学部日本語 1 学科、タマサート大学東アジア研究所、チュラロンコン大学

フィリピン：アテネオ・デ・マニラ大学、デ・ラ・サール大学、フィリピン大学アジアセンター

ベトナム：ベトナム国家大学付属人文社会科学大学、ベトナム社会科学学院、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学文学言語学部、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学日本学科

マレーシア：マラヤ大学

③ 南アジア

インド：ジャワハルラル・ネルー大学、デリー大学

④ 大洋州

オーストラリア：シドニー大学

ニュージーランド：オークランド大学

⑤ 北米

米国*：アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター**、アリゾナ州立大学、ウィッテンバーグ大学、ウェスタン・ミシガン大学、カリフォルニア州立大学サンタバーバラ校、カリフォルニア州立大学バークレー校、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校、京都アメリカ大学コンソーシアム**、コロンビア大学、サンフランシスコ・アジア美術館、シンシナティ大学、デューク大学、ファーマン大学、プリンマー大学、フロリダ国際大学、ペンシルベニア州立大学、ミシガン大学、ミシガン州立大学連合日本センター、ミシガン州立大学、南カリフォルニア大学、南カリフォルニア大学東アジア図書館、メリー・ワシントン大学

*「小規模グラント」4件を含む **米国の大学が日本国内で展開する研究・育成機関

⑥ 中南米

メキシコ：エル・コレヒオ・デ・メヒコ、メキシコ自治技術大学院

ブラジル：サンパウロ大学

⑦ 西欧

アイスランド：国立アイスランド大学

イタリア：ミラノ大学、ヴェネチア大学

英国：イーストアングリア大学、ニューカッスル大学、ロンドン大学、エジンバラ大学

スペイン：バルセロナ自治大学

フランス：パリ政治学院

ベルギー：ゲント大学、ルーヴァン・カトリック大学

⑧ 東欧

ウズベキスタン：タシケント国立東洋学大学

クロアチア：ザグレブ大学

ハンガリー：エオトヴェシ・ローランド大学

リトアニア：ヴィタウタス・マグヌス大学

ルーマニア：ブカレスト大学

ロシア：極東国立総合大学

⑨ 中東

イラク：バグダッド大学

イラン：テヘラン大学外国語外国文学部、テヘラン大学世界研究部

エジプト：アインシャムス大学

(2) 北京日本学研究中心事業

北京外国語大学に設置された北京日本学研究中心に日本専攻大学院生指導のために研究者 13 人を派遣し、修士課程学生 20 人を研究のために招へい。博士課程学生 2 人にフェローシップを供与し、教員の研究プロジェクトを支援。

北京大学に設置された現代日本研究センターには同目的で研究者 9 人を派遣し、大学院生 19 人を招へい。

2. 日本研究者への支援 (P.32 参照)

(1) 学者・研究者フェローシップ (長期) 95 人 (30 カ国)

(2) 学者・研究者フェローシップ (短期) 29 人 (15 カ国)

(3) 博士論文執筆者フェローシップ 114 人 (34 カ国)

3. 日本研究ネットワーク促進 (P.32 参照)

(1) 主催 2 件

日本研究巡回セミナー (中央アジア) 等

(2) 助成 31 件

ヨーロッパ日本研究者協会 (EAJS)、タイ国元日本留学生協会、ジャパン・ライブラリー・グループ (英国) 等

4. 知的対話・対外発信の強化 (P.33 参照)

(1) 主催 19 件

・日本・ASEAN 友好協力 40 周年記念シンポジウム「調和するアジア～文化交流の新時代」

日本と東南アジアの著名文化人による一般公開シンポジウムを、日本経済新聞社と共催。

・日印対話

・日中韓文化交流フォーラム

・日中知的交流強化事業 (グループ招へい)

・日中知的交流強化事業 (個人招へい)

・2013 年度日印社会企業家交流事業

- ・アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム
- ・ミャンマー知識人招へい
- ・スリランカ平和構築関連プロジェクト
- ・東南アジアムスリム知識人グループ招へい
- ・震災と復興に関するワークショップ「むすび塾 in チリ」
- ・国際シンポジウム「少子高齢化をアドバンテージに変えるには～日独が目指す新しい社会・労働市場政策のかたち～」
少子高齢化をテーマにした国際会議を、東京とベルリンで連続開催。
- ・日独シンポジウム「日本とドイツにおける近年の社会変化」〔出版支援〕
- ・2013年アルザス日欧知的交流事業「日本研究セミナー：戦後」
- ・日独シンポジウム「カルチュラル・コミュニケーション―新しい時代のコミュニケーションツールと国際文化交流の今後」
- ・日韓欧多文化共生都市シンポジウム「2013 安山サミット」
「多文化共生」および「インターカルチュラル・シティ」をテーマとする、日本・韓国・欧州の自治体の首長・実務者、研究者によるシンポジウムを韓国で開催。
- ・公開セミナー「多様性を活かしたまちづくり・ひとづくり」
- ・中東・北アフリカグループ招へいフォローアップ事業
- ・国際シンポジウム「北アフリカと日本の21世紀：国際文化交流が築く平和な共生社会」

(2) 助成 92 件

5. 知的交流 人材の育成 (P.33 参照)

(1) 知的交流フェローシップ 9 件

(2) 地域リーダー・若者交流支援 26 件

6. 米国との知的・草の根交流 (P.34-35 参照)

(1) 企画参画助成 10 件 (以下代表例)

- ・JET 被災者追悼事業
東日本大震災の犠牲となった元 JET 青年 2 人の出身大学における日米交流促進事業。
- ・米国シンクタンク支援
ブルッキングス研究所に日本関連の政策研究ポストを設置。
- ・日米青年政治指導者交流
両国の超党派若手政治家・政策秘書・政党スタッフ等を派遣・招へいし、各界リーダーとのネットワークを形成。
- ・日米パートナーシップ・プログラム (RIPS)
両国の協力関係の維持・発展にリーダーシップを取り得る人材の育成を目的とする研究奨励プログラム
- ・USJC ジャパン・シンポジウム 2013
日米の市民社会・ビジネス関係者等との対話を通じて、幅広いネットワーク形成を図る。

(2) 公募助成 37 件

(一般公募：新規 16 件／継続 6 件、限定公募：15 件)

(3) ニューヨーク日米センター小規模助成 16 件

(4) ニューヨーク日米センター日米協会支援 11 件

(5) 安倍フェローシップ 研究者 13 人、ジャーナリスト 4 人

緊要の取組みが必要とされる地球規模の政策課題に関する調査研究を行う研究者、及び日米間の相互理解促進に資する報道を支援すべく掘り下げた調査研究を行うジャーナリストに対する、フェローシップ供与。

(6) 日米草の根交流コーディネーター派遣 (JOI プログラム)

新規 5 人、継続 3 人、計 8 人

日本文化紹介活動を通じて日本理解を促進するためのコーディネーターを米国南部・中西部の大学・日米協会等に派遣。

7. 日米文化教育交流会議 (CULCON=カルコン)

2012 年に発足した教育タスクフォースにおける「2020 年までに日米双方向の留学生交流数を倍増させる」という提言を両国の代表に提出、フォローアップを継続。

美術対話委員会では、徳島県鳴門市にて第 4 回美術対話委員会および公開フォーラム「日米美術フォーラム～ミュージアムの未来～」を開催。

8. 米国との青少年交流 (P.36 参照)

日米教育委員会 (フルブライト・ジャパン) からの受託事業「北米地域との青少年交流事業 KAKEHASHI プロジェクト The Bridge for Tomorrow (米国事業)」

(1) 短期招へい

① 中学・高校・大学生招へい

米国の中学・高校生 686 人 (30 グループ) 及び大学生 225 人 (9 グループ) を 10 日間招へい。

② 若手研究者招へい

米国のシンクタンク等に所属する若手研究者 98 人 (10 グループ) を 10 日間招へい。

(2) 短期派遣

① 中学・高校・大学生派遣

全国各地の中学・高校生 726 人 (29 グループ) 及び大学生 236 人 (10 グループ) を米国に 10 日間派遣。

② 学生クリエイター派遣

芸術専攻の大学生 61 人 (3 グループ) を米国に 10 日間派遣。

民間からの資金協力

国際交流基金は、企業、団体、個人等、広く民間からの資金協力による支援を受けて国際文化交流事業を実施しています。

ここでは、2013年度の民間からの資金協力について寄附金制度を中心に紹介すると共に、主に寄附金制度を通じて資金協力をいただいた方々や、その協力による支援を受けた事業を紹介します。

1. 資金協力の種類

(1) 一般寄附金

国際交流基金による国際文化交流事業の経費の財源として活用します。

① 一般寄附金制度

企業、団体、個人より、寄附の時期、金額とも任意で受け入れる寄附金です。2013年度に寄附金をいただいた方々は次頁の「事業費への寄附者」、「民間出えん金寄附者」の通りです。

● 事業費への寄附

寄附金を受け入れた年度の事業経費として活用します。寄附者の希望により、実施事業の中から、寄附金を充当する事業を指定することも可能です。

● 基金(ファンド)への寄附(民間出えん金)

寄附金を基金(ファンド)に組み入れ、その運用利息を毎年度の事業費として恒久的に活用します。過去に受け入れた民間出えん金による2013年度の事業実施状況は、次頁の「民間出えん金による支援事業」の通りです。

② 法人会員制度(賛助会)

企業、団体等の法人より年会費として一定額の寄附金を受け入れ、受け入れた年度の事業経費として活用します。1口10万円で、普通会员(1~4口)と特別会員(5口以上)があります。会員には、催しのご案内、「国際交流基金年報」の送付等、各種特典を提供しています。2013年度に支援をいただいた会員は次頁の「賛助会会員」の通りです。

(2) 特定寄附金

国内の法人や個人が国内外の国際文化交流事業を支援する場合に、特定公益増進法人である国際交流基金が、その支援資金を寄附金として受け入れ、対象事業への助成金として交付する制度です。本制度を利用することで、法人や個人は寄附金に対する税制上の優遇措置を受けることができます。

対象となる事業は、国際文化交流を目的とする人物交流、海外における日本研究や日本語教育、国際文化交流を目的とする公演・展示・セミナー等の催し等です。特定寄附金の受け入れは、外部専門家で構成される審査委員会への諮問を経て決定します。2013年度の支援事業は次頁の「特定寄附金による支援事業」の通りです。

(3) その他

上記の寄附金のほか、協賛金、助成金など様々な形で民間からの資金協力による支援をいただいております。2013年度の主な支援の例は、次頁の「寄附金以外の主な支援例」の通りです。

2. 寄附金に対する税制上の優遇措置

国際交流基金は法人税法施行令第77条および所得税法施行令第217条により「公益の増進に著しく寄与する法人」(特定公益増進法人)に指定されており、上記の資金協力のうち、国内での寄附金については税制上の優遇措置の対象となります。

(1) 法人の場合

特定公益増進法人に対する寄附金の合計額、または、特別損金算入限度額のいずれか少ない金額が損金に算入されます。

(注) 特定公益増進法人に対する寄附金のうち、損金に算入されなかった金額(特別損金算入限度額を超える部分の金額)は、通常の寄附金の額に含めます。

寄附金の損金算入限度額は次の算式によります。

● 通常の寄附金の損金算入限度額

$$(\text{資本金等の額} \times \text{当期の月数} / 12 \times 0.25\% + \text{所得の金額} \times 2.5\%) \times 1/4$$

● 特定公益増進法人に対する寄附金の損金算入限度額

(特別損金算入限度額)

$$(\text{資本金等の額} \times \text{当期の月数} / 12 \times 0.375\% + \text{所得の金額} \times 6.25\%) \times 1/2$$

(2) 個人の場合

所得の40%を上限として、寄附金の合計額から2千円を差し引いた金額が所得控除の対象となります。相続財産からの寄附についても、税制上の優遇措置があります。

3. 2013年度寄附金額実績

	件数	金額	
一般寄附金	60件	50,338,525円	
	賛助会	38件	7,550,000円
	事業費への寄附	19件	41,777,525円
	民間出えん金	3件	1,011,000円
特定寄附金	31件	335,941,452円(注1)	

(注1) うち、332,431,452円および2012年度より繰越した特定寄附金26,455,500円を、16事業(次頁「特定寄附金による支援事業」参照)に対する助成金として交付しました。残額(3,510,000円)は、2件の事業に対する助成金として2014年度に交付予定です。

(注2) 1972年の国際交流基金設立以来2013年度末までの累計で、一般寄附金として約25億4,968万円(現物寄附の評価額を含む)、特定寄附金として約665億2,982万円を受け入れています。

(注3) 寄附金以外の民間からの資金協力として、2013年度に総額約5,800万円の支援(協賛金、助成金等)をいただいております。

2013年度の寄附金等による支援者と支援事業一覧 (敬称略)

事業費への寄附者 ()内は寄付対象事業、50音順

黒川尚悟、土肥松男(日中交流センター事業)
鈴木千寿(「杉本文楽 曾根崎心中」ローマ公演)
日本たばこ産業(株)(ロシアの大学への日本語・日本研究支援)
野田尚史(国内大学連携大学生訪日研修事業)
(株)フジテレビジョン(ローマ日本文化会館50周年記念事業)
三菱商事(株)(「杉本文楽 曾根崎心中」マドリッド公演、「南蛮漆器:スペインに残された『日本』」展)
(株)ロッテ(日韓学生パッケージ・デザイン交流プロジェクト)
小谷幸恵、(株)美研インターナショナル(事業費全般)
他個人6人、法人1社、匿名1団体(関西国際センター事業、国内大学連携大学生訪日研修事業、米国JET記念高校生訪日研修事業、「南蛮漆器:スペインに残された『日本』」展、ローマ日本文化会館50周年記念事業、事業費全般)

民間出えん金寄附者

片倉素子(故人・ご遺志による寄附)
個人2人

民間出えん金による支援事業(寄附者の意向に基づき特別事業を設定し、事業名に寄附者の名を付する「冠寄附」の例)

高砂熱学工業・日本研究フェロシップ
寄附者は高砂熱学工業株式会社。東南アジアの日本研究振興のために、同地域の若手日本研究者に訪日研究の機会を提供。
2013年度はベトナムからフェロ1人を招へい。
「渡辺健基金」図書寄贈
寄附者は渡辺行信氏(米国研修中に事故で逝去された元外務省職員渡辺健氏のご遺族)。中国天津社会科学院に日本研究のための図書を寄贈。
2013年度は229冊の図書を寄贈。

賛助会会員 (2013年度末現在、50音順)

(1) 特別会員

松竹(株)、(株)三菱東京UFJ銀行、他法人2社

(2) 普通会員

(一財)池坊華道会、出光興産(株)、(株)印象社、ウシオ電機(株)、SMBC日興証券(株)、(一財)NHKインターナショナル、カトーレック(株)、(株)講談社、(公財)講道館、(株)国際サービス・エージェンシー、(学)駒澤大学、(一財)今日庵、(一財)少林寺拳法連盟、

スターレーン航空サービス(株)、(一財)全日本剣道連盟、(株)第一成和事務所、ダイキン工業(株)、大和証券(株)、東京ビジネスサービス(株)、(一財)ニッポンドットコム、(一社)日本映画製作者連盟、(株)日本折紙協会、(一財)日本国際協力センター、(株)日立製作所、富士ゼロックス(株)、(株)凡人社、みずほ証券(株)、(株)三井住友銀行、三菱UFJモルガン・スタンレー証券(株)、(株)明治書院ホールディングス、森ビル(株)、他法人3社

特定寄附金による支援事業 ()内は事業実施国、順不同

アジア女子大学奨学金プログラム (バングラデシュ)
2013iEARN 国際会議教員派遣事業 (カタール)
日米研究インスティテュート (米国)
デューク・ロー・スクール日本法・文化プログラム (米国)
エルエスエイチアジア奨学金 (日本)
アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター創立 50 周年プロジェクト (日本)
ジャパン・リターン・プログラム 2013 年 “コミュニケーションと平和” 日本語サミット (日本)
第 19 回ホノルル・フェスティバル (米国)
万国国際法学会総会日本大会 (日本)
四天王寺ワッソ (日本)
日韓交流おまつり 2013 (日本)
日中ジャーナリスト交流会議 (中国・日本)
アジア犯罪学会第 6 回年次大会 (日本)
ミュージック・フロム・ジャパン 2014 年音楽祭 (米国)
ポートランド日本庭園拡張計画 (米国)
ケロッグ経営大学院グローバル・ハブ (米国)

寄附金以外の主な支援例 (順不同)

(公財)石橋財団(「第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館展示」への寄附助成)
(公財)かめのり財団(「にほんご人フォーラム」他計4件への共催及び助成)
JTI (Japan Tobacco International) (「ローマ日本文化会館 50周年記念事業」他計2件への協賛)
(一社)尚友倶楽部(「ベトナム日本研究学生・若手研究者訪日研修」他計2件への助成)
チェスキーナ洋子(「杉本文楽 曾根崎心中」ローマ公演への協賛)

(注)当基金ウェブサイトの「寄附者等一覧」で支援例をより詳しくご紹介しています。
(<http://www.jpff.go.jp/j/support/donation/list/index.html>)

財務諸表

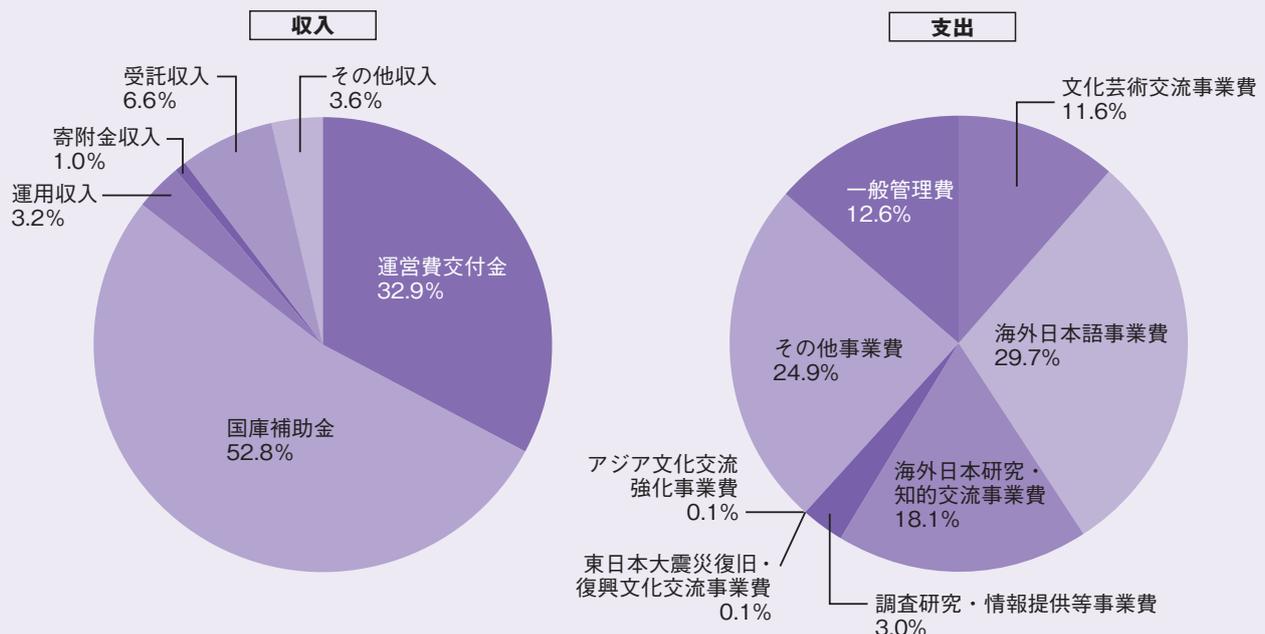
決算報告書 (2013年4月1日～2014年3月31日)

[単位:円]

区分		予算額	決算額
収入	運営費交付金	12,495,049,000	12,495,049,000
	国庫補助金	20,034,581,000	20,034,581,000
	運用収入	1,188,431,000	1,200,131,503
	寄附金収入	392,568,000	385,268,977
	受託収入	2,454,631,000	2,492,859,302
	その他収入	998,284,000	1,356,047,441
	計		37,563,544,000

支出	業務経費	予算額	決算額
	業務経費	14,430,784,982	14,479,248,958
	文化芸術交流事業費	1,908,097,000	1,919,876,823
	海外日本語事業	4,923,760,000	4,916,309,144
	海外日本研究・知的交流事業費	3,186,482,000	2,994,838,525
	調査研究・情報提供等事業費	441,185,000	492,092,845
	東日本大震災復旧・復興文化交流事業費	0	24,425,214
	アジア文化交流強化事業費	10,167,000	11,912,175
	その他事業費	3,961,093,982	4,119,794,232
	一般管理費	2,139,738,000	2,081,473,753
	人件費	1,420,851,000	1,376,367,873
	物件費	718,887,000	705,105,880
計		16,570,522,982	16,560,722,711

(注) 決算報告書においては国際交流基金の国内勤務役職員人件費は一括して一般管理費に計上しているが、損益計算書においては、国内勤務役職員の勤務実態に合わせて各業務分野毎の費用として計上している。



(注1) 決算額

(注2) 四捨五入による端数処理のため、計と一致しない場合がある。

貸借対照表 (2014年3月31日)

[単位：円]

資産の部	I 流動資産	現金及び預金	5,705,504,594			
		有価証券	24,055,347,660			
		前払費用	72,417,828			
		未収収益	207,392,469			
		未収金	448,831,107			
		その他の流動資産	18,089,607			
		流動資産合計		30,507,583,265		
	II 固定資産	1 有形固定資産	建物	13,298,391,551		
			減価償却累計額	△ 4,863,838,198	8,434,553,353	
			構築物	318,519,361		
			減価償却累計額	△ 230,570,104	87,949,257	
			機械装置	13,222,262		
			減価償却累計額	△ 8,912,964	4,309,298	
			車両運搬具	121,945,355		
			減価償却累計額	△ 99,895,639	22,049,716	
			工具器具備品	1,188,225,770		
			減価償却累計額	△ 894,198,740	294,027,030	
美術品				471,704,676		
土地				136,369,000		
建設仮勘定				39,553,440		
有形固定資産合計				9,490,515,770		
2 無形固定資産		借地権		3,959,000		
		ソフトウェア		174,080,664		
		電話加入権		441,000		
		ソフトウェア仮勘定		935,550		
		無形固定資産合計		179,416,214		
		3 投資その他の資産	投資有価証券	55,335,206,890		
長期預金			700,000,000			
敷金保証金			859,499,990			
投資その他の資産合計			56,894,706,880			
固定資産合計				66,564,638,864		
資産合計				97,072,222,129		
負債の部		I 流動負債	運営費交付金債務	171,022,361		
			預り補助金等	2,866,023,000		
	預り寄附金		26,798,653			
	未払金		538,621,684			
	未払費用		2,024,165			
	未払消費税		539,500			
	前受金		1,552,984,826			
	預り金		4,697,122			
	リース債務		9,200,454			
	為替予約		232,317			
	引当金					
	賞与引当金		14,286,815	14,286,815		
	資産除去債務			12,884,503		
	流動負債合計			5,199,315,400		
	II 固定負債	資産見返負債				
		資産見返運営費交付金	1,300,023,089			
		資産見返寄附金	2,558,162			
		ソフトウェア仮勘定見返運営費交付金	935,550	1,303,516,801		
		長期預り補助金等		17,161,739,348		
		長期リース債務		15,956,270		
		資産除去債務		44,689,655		
		固定負債合計		18,525,902,074		
		負債合計				23,725,217,474
		純資産の部	I 資本金	政府出資金	77,865,325,177	
				資本金合計		77,865,325,177
			II 資本剰余金	資本剰余金	90,587,898	
				損益外減価償却累計額 (△)	△ 5,000,476,904	
損益外減損損失累計額 (△)	△ 126,000					
損益外利息費用累計額 (△)	△ 17,515,110					
民間出えん金	907,963,787					
資本剰余金合計				△ 4,019,566,329		
III 繰越欠損金	当期未処理損失		△ 498,521,876			
	(うち当期総利益)		762,467,844)			
	繰越欠損金合計			△ 498,521,876		
IV 評価・換算差額等	繰延ヘッジ損益		△ 232,317			
	評価・換算差額合計			△ 232,317		
純資産合計					73,347,004,655	
負債純資産合計					97,072,222,129	

損益計算書 (2013年4月1日～2014年3月31日)

[単位：円]

経常費用	文化芸術交流事業費		2,125,102,108
	日本語教育事業費		5,183,716,914
	日本研究・知的交流事業費		3,162,716,497
	調査研究・情報提供等事業費		593,669,191
	東日本大震災復旧・復興文化交流事業費		24,425,214
	アジア文化交流強化事業費		6,818,652
	その他事業費		
	在外事業費	3,880,932,932	
	文化交流施設等協力事業費	364,783,911	4,245,716,843
	一般管理費		1,132,498,650
	財務費用		591,379
	経常費用合計		
経常収益	運営費交付金収益		12,362,881,858
	運用収益		1,193,688,217
	受託収入		988,523,876
	補助金等収益		6,818,652
	寄附金収益		
	寄附金収益	31,150,448	
	特定寄附金収益	358,886,952	390,037,400
	資産見返戻入		
	資産見返運営費交付金戻入	207,436,645	
	資産見返寄附金戻入	668,975	208,105,620
	財務収益		
	受取利息	825,123	825,123
	雑益		
	日本語能力試験受験料等収益	903,747,751	
その他の雑益	1,184,154,600	2,087,902,351	
経常収益合計			17,238,783,097
経常利益			763,527,649
臨時損失	固定資産除却損		17,219,851
	減損損失		1,060,120
			18,279,971
臨時利益	資産見返運営費交付金戻入		17,219,851
	固定資産売却益		315
			17,220,166
当期純利益			762,467,844
当期総利益			762,467,844

損失の処理に関する書類 (2014年8月22日)

[単位：円]

I	当期末処理損失		498,521,876
	当期総利益	762,467,844	
	前期繰越欠損金	1,260,989,720	
II	次期繰越欠損金		498,521,876

諮問委員会等 (2013 年度)

以下の方々に委員として、ご協力いただいています。(50音・アルファベット順、敬称略)

国際交流基金の運営に関する諮問委員会

五百旗頭 真

熊本県立大学理事長、ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長

池内 恵

東京大学先端科学技術研究センター准教授

川島 真

東京大学大学院総合文化研究科准教授

久保 文明

東京大学大学院法学政治学研究所教授

迫田 久美子

国立国語研究所日本語教育研究・情報センター長

千野 境子

産経新聞社客員論説委員

永井 多恵子

せたがや文化財団理事長、国際演劇協会会長

細谷 雄一

慶應義塾大学法学部教授

水沢 勉

神奈川県立近代美術館館長

宮本 亜門

演出家

渡辺 靖

慶應義塾大学環境情報学部教授

日本研究米国諮問委員会 (American Advisory Committee)

学者・研究者

フェローシップ小委員会

Research Fellowship
Screening Subcommittee

Keller Kimbrough

コロラド大学 文学

Susan Long

ジョン・キャロル大学 人類学

Anne Walthall

カリフォルニア大学アーバイン校 歴史学

Gennifer Weisenfeld

デューク大学 美術史

Kikuko Yamashita

ブラウン大学 日本語学/言語学

博士論文執筆者

フェローシップ小委員会

Doctoral Fellowship
Screening Subcommittee

E. Taylor Atkins

北イリノイ大学 歴史学

William Bodiford

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 宗教学

Rebecca Copeland

ワシントン大学(セントルイス) 文学

Sabine Frühstück

カリフォルニア大学サンタバーバラ校 カルチュラル・スタディー

Michael Smitka

ワシントン・アンド・リー大学 経済学

機関助成小委員会

Institutional Project Support
Screening Subcommittee

Daniel Botsman

イエール大学 歴史学

David Leheny

プリンストン大学 政治学

Jennifer Robertson

ミシガン大学 人類学

Richard Samuels

マサチューセッツ工科大学 政治学

Ann Sherif

オバーリン大学 文学

パリ日本文化会館運営審議会

フランス側委員

Louis Schweitzer

日仏パートナーシップ仏外相特別代表
ルノー社名誉会長

Paul Andreu

建築家

Jean-Louis Beffa

サンゴバン社会長

Augustin Berque

地理学者、元日仏会館フランス学長

Philippe Faure

元駐日フランス大使

André Larqué

パリ・ベルシー総合スポーツセンター理事長

Jean Maheu

会計検査院顧問

Jean-Robert Pitte

パリ第4(ソルボンヌ)大学元学長

Christian Sautter

パリ市経済・財政・雇用担当助役、
元経済財政工業大臣

Valérie Terranova

ジャック・シラク財団事務局長

日本側委員

松浦 晃一郎

日仏会館理事長 元ユネスコ事務局長

伊東 順二

美術評論家、富山大学芸術文化学部教授

萩野 アンナ

作家、慶應義塾大学文学部教授

柏倉 康夫

放送大学名誉教授

酒井 忠康

世田谷美術館館長

佐々木 元

日本電気(株)特別顧問

西垣 通

東京大学大学院情報学環教授

芳賀 徹

東京大学名誉教授

早間 玲子

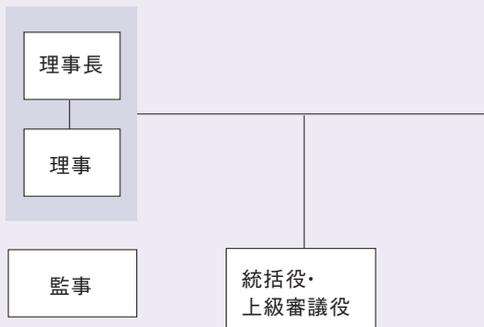
建築家

堀場 厚

(株)堀場製作所代表取締役会長兼社長

組織図

2014年7月1日現在



本部	総務部	総務課 情報公開室 人事課 給与・人事評価室 拠点管理課 パリ日本文化会館業務室 システム管理課
	経理部	財務課 財務監理室 会計課
	企画部	総合戦略課 事業戦略課
	文化事業グループ 文化事業部	企画調整チーム 米州チーム アジア・大洋州チーム 欧州・中東・アフリカチーム 情報提供・映像管理チーム
	日中交流センター	
	日本語事業グループ 日本語事業部	企画調整チーム 事業第1チーム 事業第2チーム
	日本語試験センター	試験運営チーム 試験制作チーム
	日本研究・知的交流事業グループ 日本研究・知的交流部	企画調整チーム 米州チーム アジア・大洋州チーム 欧州・中東・アフリカチーム
	日米センター	
	青少年交流室	
附属機関	アジアセンター	総務調整チーム 日本語事業チーム 文化事業チーム コミュニケーション企画チーム
	コミュニケーションセンター	
	監査室	
支部	日本語国際センター	教師研修チーム 教材開発チーム
	関西国際センター	教育事業チーム
海外事務所	京都支部	
	ローマ日本文化会館 ケルン日本文化会館 パリ日本文化会館 ソウル日本文化センター 北京日本文化センター ジャカルタ日本文化センター バンコク日本文化センター マニラ日本文化センター クアラルンプール日本文化センター ニューデリー日本文化センター シドニー日本文化センター	トロント日本文化センター ニューヨーク日本文化センター ロサンゼルス日本文化センター メキシコ日本文化センター サンパウロ日本文化センター ロンドン日本文化センター マドリッド日本文化センター ブダペスト日本文化センター モスクワ日本文化センター カイロ日本文化センター ベトナム日本文化交流センター(ハノイ)

拠点一覧

国内拠点

本部

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-4-1
<http://www.jpj.go.jp/>
 ■コミュニケーションセンター
 TEL. 03-5369-6075
 FAX. 03-5369-6044
 ■JFIC ライブラリー
 TEL. 03-5369-6086
 FAX. 03-5369-6048
<http://www.jpj.go.jp/j/about/jfic/lib/>

日本語国際センター

〒330-0074 埼玉県さいたま市浦和区北浦和5-6-36
 TEL. 048-834-1180
 FAX. 048-834-1170
<http://www.jpj.go.jp/j/urawa/>
 ■図書館
 TEL. 048-834-1185
 FAX. 048-830-1588
http://www.jpj.go.jp/j/urawa/j_library/j_library.html

関西国際センター

〒598-0093 大阪府泉南郡田尻町りんくうポート北3-14
 TEL. 072-490-2600
 FAX. 072-490-2800
<http://www.jfkc.jp/>
 ■図書館
 TEL. 072-490-2605
 FAX. 072-490-2805
<http://www.jfkc.jp/ja/library/>

京都支部

〒606-8436
 京都市左京区粟田口鳥居町2番地の1
 京都市国際交流会館3階
 TEL 075-762-1136
 FAX 075-762-1137
<http://www.jpj.go.jp/j/about/outline/kyoto.html>

海外拠点

イタリア

ローマ日本文化会館
 Istituto Giapponese di Cultura in Roma
 (The Japan Cultural Institute in Rome)
 Via Antonio Gramsci 74,
 00197 Roma, Italy
 TEL: 39-06-322-4754/94
 FAX: 39-06-322-2165
 URL: <http://www.jfroma.it/> (イタリア語・日本語)

ドイツ

ケルン日本文化会館
 Japanisches Kulturinstitut Köln
 (The Japan Cultural Institute in Cologne)
 Universitätsstraße 98,
 50674 Köln, Germany
 TEL: 49-221-9405580
 FAX: 49-221-9405589
 URL: <http://www.jki.de/> (ドイツ語・日本語)

フランス

パリ日本文化会館
 Maison de la culture du Japon à Paris
 (The Japan Cultural Institute in Paris)
 101 bis, quai Branly,
 75740 Paris Cedex 15, France
 TEL: 33-1-44-37-95-00
 FAX: 33-1-44-37-95-15
 URL: <http://www.mcjp.fr/>
 (フランス語・日本語・英語)

韓国

ソウル日本文化センター
 The Japan Foundation, Seoul
 Vertigo Tower. 2&3F, Yonseiro 8-1,
 Seodaemun-gu,
 Seoul 120-833, Korea
 TEL: 82-2-397-2820
 FAX: 82-2-397-2830
 URL: <http://www.jpj.or.kr/> (韓国語・日本語・英語)

中国

北京日本文化センター
 The Japan Foundation, Beijing
 #301, 3F SK Tower,
 No.6 Jia Jianguomenwai Avenue,
 Chaoyang District,
 Beijing, 100022, China
 TEL: 86-10-8567-9511
 FAX: 86-10-8567-9075
 URL: <http://www.jpfbj.cn/> (中国語)

インドネシア

ジャカルタ日本文化センター
 The Japan Foundation, Jakarta
 Summitmas I, 2-3F,
 Jalan Jenderal Sudirman, Kav. 61-62
 Jakarta Selatan 12190, Indonesia
 TEL: 62-21-520-1266
 FAX: 62-21-525-1750
 URL: <http://www.jpj.or.id/>
 (インドネシア語・日本語・英語)

タイ

バンコク日本文化センター
 The Japan Foundation, Bangkok
 Serm-Mit Tower, 10F,
 159 Sukhumvit 21 (Asoke Road),
 Bangkok 10110, Thailand
 TEL: 66-2-260-8560~64
 FAX: 66-2-260-8565
 URL: <http://www.jfbkk.or.th/index.php>
 (タイ語・日本語・英語)

フィリピン

マニラ日本文化センター
 The Japan Foundation, Manila
 23rd Floor, Pacific Star Bldg.,
 Sen. Gil J. Puyat Ave. cor. Makati Ave.,
 Makati City,
 Metro Manila 1226, The Philippines
 TEL: 63-2-811-6155~8
 FAX: 63-2-811-6153
 URL: <http://www.jfmo.org.ph/>
 (英語・日本語)

マレーシア

クアラルンプール日本文化センター
 The Japan Foundation, Kuala Lumpur
 18th Floor, Northpoint Block B,
 Mid-Valley City, No.1, Medan Syed Putra,
 59200, Kuala Lumpur, Malaysia
 TEL: 60-3-2284-6228
 FAX: 60-3-2287-5859
 URL: <http://www.jfkl.org.my/> (英語)

インド

ニューデリー日本文化センター
 The Japan Foundation, New Delhi
 5-A, Ring Road, Lajpat Nagar-IV,
 New Delhi 110024, India
 TEL: 91-11-2644-2967/68
 FAX: 91-11-2644-2969
 URL: <http://www.jfindia.org.in/> (英語)

オーストラリア

シドニー日本文化センター
 The Japan Foundation, Sydney
 Level 4, Central at Central Park,
 28 Broadway, Chippendale
 NSW 2008 Australia
 TEL: 61-2-8239-0055
 URL: <http://www.jpj.org.au/> (英語)

カナダ

トロント日本文化センター
 The Japan Foundation, Toronto
 131 Bloor Street West, Suite 213,
 Toronto, Ontario, M5S 1R1, Canada
 TEL: 1-416-966-1600
 FAX: 1-416-966-9773
 URL: <http://www.jftor.org/> (英語)

米国

ニューヨーク日本文化センター
 The Japan Foundation, New York
 152 West 57th Street, 17F
 New York, NY 10019, U.S.A.
 TEL: 1-212-489-0299
 FAX: 1-212-489-0409
 URL: <http://www.jfnny.org/> (英語)

ニューヨーク日米センター

The Japan Foundation
 Center for Global Partnership NY
 152 West 57th Street, 17F
 New York, NY 10019, U.S.A.
 TEL: 1-212-489-1255
 FAX: 1-212-489-1344

ロサンゼルス日本文化センター

The Japan Foundation, Los Angeles
 5700 Wilshire Boulevard, suite 100
 Los Angeles, CA 90036, U.S.A
 TEL: 1-323-761-7510
 FAX: 1-323-761-7517
 URL: <http://www.jflac.org/> (英語)

メキシコ

メキシコ日本文化センター
 The Japan Foundation, Mexico
 Av. Ejército Nacional No. 418, 2do Piso,
 Col. Chapultepec Morales,
 CP 11570, Mexico, D.F., Mexico
 TEL: 52-55-5254-8506/8510/8491
 FAX: 52-55-5254-8521
 URL: <http://www.jfmex.org> (スペイン語)

ブラジル

サンパウロ日本文化センター
 The Japan Foundation, São Paulo
 Avenida Paulista 37, 2º
 andar CEP 01311-902,
 São Paulo, SP, Brasil
 TEL: 55-11-3141-0843/0110
 FAX: 55-11-3266-3562
 URL: <http://fjps.org.br/> (ポルトガル語)

英国

ロンドン日本文化センター
 The Japan Foundation, London
 Russell Square House 6F,
 10-12 Russell Square,
 London, WC1B 5EH,
 United Kingdom
 TEL: 44-20-7436-6695
 FAX: 44-20-7323-4888
 URL: <http://www.jpj.org.uk/> (英語)

スペイン

マドリッド日本文化センター
 The Japan Foundation, Madrid
 Calle Almagro 5, 4a planta,
 28010 Madrid, Spain
 TEL: 34-91-310-1538
 FAX: 34-91-308-7314
 URL: <http://www.fundacionjapon.es/>
 (スペイン語・日本語)

ハンガリー

ブダペスト日本文化センター
 The Japan Foundation, Budapest
 Oktogon Háza 2F, Aradi u.8-10,
 1062 Budapest, Hungary
 TEL: 36-1-214-0775/6
 FAX: 36-1-214-0778
 URL: <http://www.japanalapitvany.hu/>
 (ハンガリー語・日本語・英語)

ロシア

全ロシア国立外国文献図書館
 「国際交流基金」文化事業部
 (モスクワ日本文化センター)
 The Japanese Culture Department
 "Japan Foundation" of the All-Russia State
 Library for Foreign Literature
 4th Floor, Nikoloyamskaya Street, 1,
 Moscow, 109189
 Russian Federation
 TEL: 7-495-626-5583/85
 FAX: 7-495-626-5568
 URL: <http://www.jpfrw.ru/> (ロシア語・日本語)

エジプト

カイロ日本文化センター
 The Japan Foundation, Cairo
 5th Floor, Cairo Center Building,
 106 Kasr Al-Aini Street,
 Garden City, Cairo,
 Arab Republic of Egypt
 TEL: 20-2-2794-9431/9719
 FAX: 20-2-2794-9085
 URL: <http://www.jfcairo.org/>
 (アラビア語・英語)

ベトナム

ベトナム日本文化交流センター
 The Japan Foundation Center for
 Cultural Exchange in Vietnam
 No.27 Quang Trung Street,
 Hoan Kiem District,
 Hanoi, Vietnam
 TEL: 84-4-3944-7419/20
 FAX: 84-4-3944-7418
 URL: <http://jpj.org.vn/>
 (ベトナム語・日本語・英語)

ご案内

ウェブサイト

ホームページ、メールマガジン

国際交流基金の事業紹介、イベント告知等の最新情報、公募プログラム申請情報、便利な日本語教材、過去に行った調査報告、海外拠点のウェブサイトへのリンク等、様々な情報を発信しています。

■国際交流基金

→ <http://www.jpf.go.jp/>

■メールマガジンの登録

→ [国際交流基金ホームページ](#) → [メールマガジン](#)

ブログ、ツイッター、フェイスブック

■ブログ「地球を、開けよう。」

→ <http://thejapanfoundation.blogspot.jp/>

■ツイッター

→ <https://twitter.com/japanfoundation>

■フェイスブック

→ <https://www.facebook.com/TheJapanfoundation>

ウェブマガジン

■をちこち Magazine

→ <http://www.wochikochi.jp/>

事業ウェブサイト

【文化芸術交流】

■日本のアーティスト・イン・レジデンス「AIR_J」

→ <http://www.air-j.info/>

■舞台芸術情報「Performing Arts Network Japan」

→ <http://performingarts.jp/>

■翻訳推薦著作リスト

→ https://www.jpf.go.jp/j/culture/media/publish/worth_sharing/index.html

■日本の出版物に関する書誌情報誌『Japanese Book News』（英語）

→ <http://www.jpf.go.jp/e/publish/periodic/index.html>

■日本文学翻訳書誌検索

→ http://www.jpf.go.jp/JF_Contents/InformationSearchService?ContentNo=13&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html

■日本映画データベース「JFDB」

→ <http://jfdb.jp/>

【日中交流センター】

■心連心

→ <http://www.chinacenter.jp>

【日本語教育】

■海外日本語教育機関調査

→ <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>

■日本語教育機関検索

→ <https://jpsurvey.net/jfsearch/>

■『国際交流基金日本語教育紀要』

→ <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/bulletin/index.html>

■日本語能力試験（JLPT）

→ <http://www.jlpt.jp/>

【日本語教師支援】

■「みんなの教材サイト」

→ <http://minnanokyozaai.jp>

■「JF日本語教育スタンダードウェブサイト」

→ <http://jfstandard.jp>

■「みんなの『Can-do』サイト」

→ <http://jfstandard.jp/cando>

■『日本語教育通信』

→ <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/index.html>

【日本語学習者支援（eラーニング）】

■「NIHONGO e な」

→ <http://nihongo-e-na.com>

（iOS 版 <http://nihongo-e-na.com/ios>）

（Android 版 <http://nihongo-e-na.com/android>）

■「日本語でケアナビ」

→ <http://nihongodecarenavi.jp>

（スマートフォン版 <http://nihongodecarenavi.net/sp>）

■「アニメ・マンガの日本語」

→ <http://anime-manga.jp>

■「エリンが挑戦!にほんごできます。」

→ <http://erin.ne.jp/>

■「まるごと 日本のことばと文化」

→ <http://marugoto.org/>

■「まるごと+（まるごとプラス）」

→ <http://marugotoweb.jp/>

■「まるごとのことば」

→ <http://words.marugotoweb.jp>

（スマートフォン版 <http://words.marugotoweb.jp/sp>）

■インターネット日本語試験「すしテスト」

→ <https://momo.jpf.go.jp/sushi/>

【日米センター】

■日米センター

→ <http://www.jpf.go.jp/cgp/index.html>

■安倍フェローシップ 研究者等対象

→ <http://www.ssrc.org/fellowships/abe-fellowship/>

■安倍フェローシップ ジャーナリスト対象

→ <http://www.ssrc.org/fellowships/abe-fellowship-for-journalists/>

■JOI プログラム

→ <http://www.jpf.go.jp/cgp/fellow/joi/index.html>

■公募助成プログラム

→ <http://www.jpf.go.jp/cgp/grant/index.html>

■CULCON 日米文化教育交流会議

→ <http://www.jpf.go.jp/culcon/>

【アジアセンター】

■アジアセンター

→ <http://jfac.jp/>

JFIC ライブラリー

国際文化交流と日本文化について、専門性の高いコレクション（図書：約37,000冊、雑誌：約470点、映像資料：約730点）を所蔵しています。研究者から一般の方まで、それぞれのニーズにあった情報や資料に出会えるよう、専門司書がきめ細かなサービスを提供します。

開館日時は月曜日～金曜日 10:00～19:00、閉館日は土・日曜日・祝日・毎月最終日・年末年始・蔵書点検期間です。

お問い合わせは、lib@jpf.go.jp まで。

国際交流基金本部 アクセスマップ



東京メトロ丸の内線 四谷三丁目駅 1、2番出口より徒歩3分

国際交流基金 2013 年度年報

2014 年 10 月発行

編著・発行：国際交流基金 コミュニケーションセンター
〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

TEL.03-5369-6075 FAX.03-5369-6044

編集・制作：株式会社ジャパックス+ 有限会社ファイブ

印刷：図書印刷株式会社

JAPANFOUNDATION 
<http://www.jpf.go.jp/>